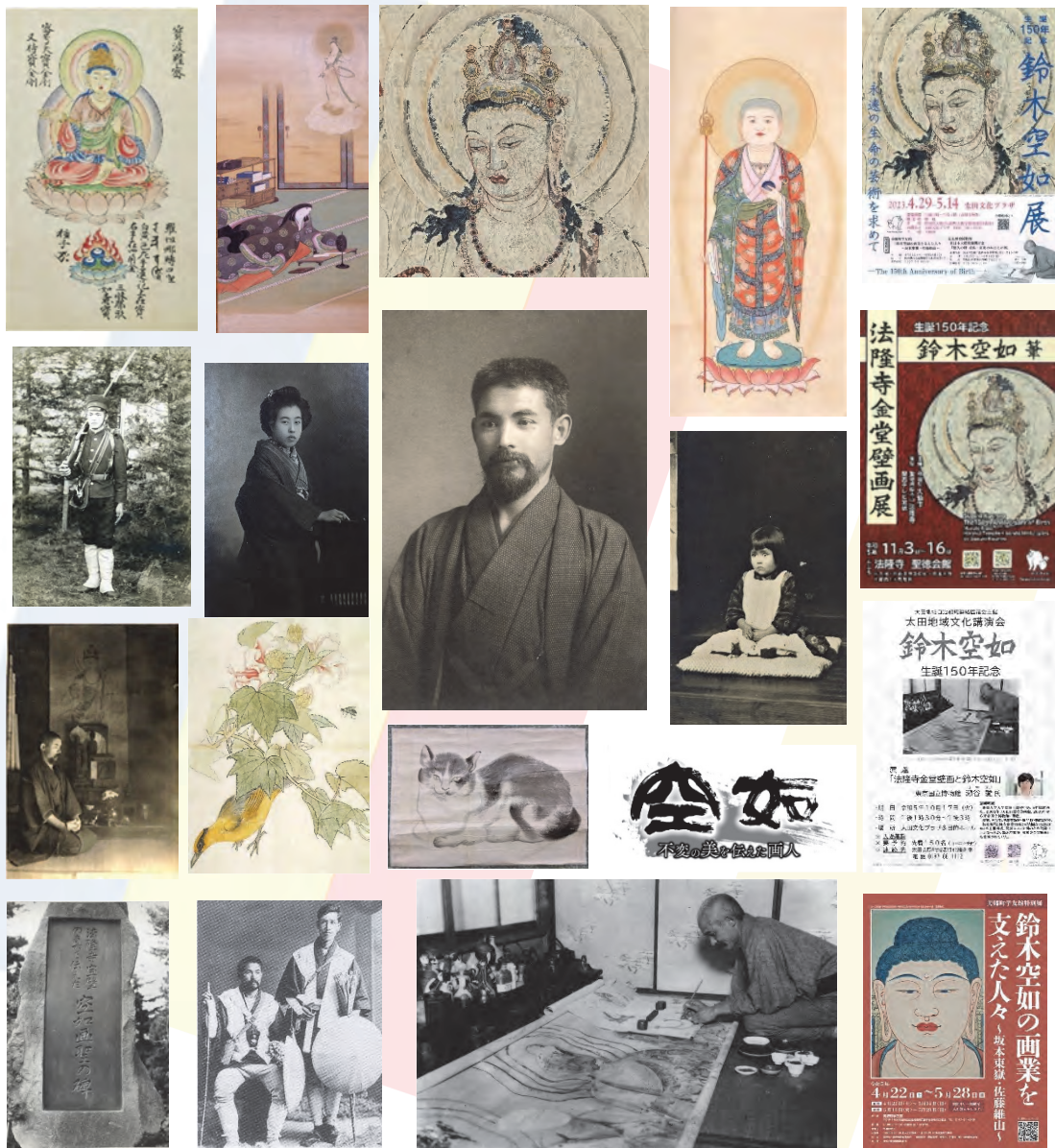


生誕150年 鈴木空如顕彰事業 実施報告書



秋田県大仙市
令和6年3月

表紙写真解説

鈴木空如 「金剛界諸尊形像」(金胎仏画帖)	鈴木空如 「霊夢」	鈴木空如 「法隆寺金堂壁画」第6号壁観音菩薩像(部分)	鈴木空如 「童形地藏菩薩」	特別展 チラシ
鈴木空如 日清戦争出征記念写真	妻 なを (29歳)	鈴木空如 (40歳)	娘 豊子 (3歳)	関連展示 チラシ
鈴木空如 自室にて	鈴木空如 「山鳥図」 (10歳時)	鈴木空如 「猫の図」	特別番組 ロゴ	講演会 チラシ
鈴木空如 顕彰碑	出雲地方巡礼記念写真 (鈴木空如/ 竹田霞村)	作画風景(法隆寺金堂壁画 第9号壁、抜き写しの様子)		特別展 チラシ

あいさつ

生誕 150 年 鈴木空如顕彰事業を終えて

鈴木空如(本名:久治)は、明治6(1873)年2月25日に現在の秋田県大仙市太田町(旧小神成村)の旧家に六人兄妹の末っ子として生まれ、19歳の時に東京美術学校入学を目指して上京します。しかし、上京後まもなく日清戦争が勃発し出征などにより入学が叶わず、上京後6年余りを経た、明治31(1898)年に東京美術学校日本画選科に入学します。卒業後は仏画家としての道を歩み、焼損前の法隆寺金堂壁画を原寸大で三度模写し、さらに密教図像の名品の多くを模写し後世に伝えました。いま、その画業は見直され学術の上でも大きな驚きを以て評価されています。

令和5(2023)年は空如生誕150年を記念するべき年にあたることから、当市では空如の画業とその生き方を顕彰するため、大仙市太田文化プラザにおいて特別展「鈴木空如展」を、奈良県法隆寺聖徳会館においては特別展「鈴木空如筆 法隆寺金堂壁画展」をそれぞれ開催いたしました。

また、特別番組「空如～不変の美を伝えた画人」を制作放送し、さらに東京国立博物館 瀬谷愛様をお招きして記念講演会「法隆寺金堂壁画と鈴木空如」を開催いたしております。

いずれの事業におきましても、関係者の皆様の多大なるご理解とご協力を賜りました。

特に、法隆寺聖徳会館にて開催した特別展では、監修者の東北大学名誉教授 有賀祥隆様、東京国立博物館 瀬谷愛様からご指導を賜り、さらに、聖徳宗総本山 法隆寺様には、会場のご提供から展示準備のご協力に至るまで絶大なご協力を賜りました。ここに記して深く御礼を申し上げます。

また、生家鈴木家様はじめご親族の皆様には、本事業をはじめ当市の取組にご理解とご協力をいただき誠にありがとうございました。深く御礼を申し上げます。

当市では本事業を契機といたしまして、今後さらに鈴木空如の画業と芸術に身を捧げたその生き方を顕彰し、子どもたちへの教育と地域の文化振興により一層励んでまいります。

結びに、ご尽力いただきました関係者の皆様に深く感謝を申し上げますとともに、皆様のご健勝を心から祈念いたしまして、あいさつとさせていただきます。

令和6年3月

大仙市長 老松博行

目次

生誕 150 年鈴木空如顕彰事業について 大仙市長 老松博行 … 1

〈実施報告〉

特別展

鈴木空如展—永遠の生命の芸術を求めて … 6

特別展

鈴木空如筆 法隆寺金堂壁画展 … 19

講演会

演題「法隆寺金堂壁画と鈴木空如」 … 31

特別番組

空如～不変の美を伝えた画人～ … 53

関連展示

鈴木空如の画業を支えた人びと～坂本東嶽・佐藤維山～ … 54

協力展示

東日本大震災復興祈念「悠久の絆奈良・東北のみほとけ展」 … 55

〈参考資料〉

『世に隠れたる真の画人 鈴木空如』 … 59

『模写ってなんだろう？ 模写をするってどういうこと？』 … 67

〈実施報告〉



空如筆「法隆寺金堂壁画」より

事業概要一覧

【特別展】 生誕 150 年記念 鈴木空如展—永遠の生命の芸術を求めて

主 催：秋田県大仙市

会 期：令和5(2023)年 4 月 29 日(土)—5 月 14 日(日)

会 場：大仙市太田文化プラザ

【特別展】 鈴木空如筆 法隆寺金堂壁画展

主 催 秋田県大仙市

後 援 聖徳宗総本山 法隆寺／関西テレビ放送

総監修 東北大学名誉教授・東京藝術大学客員教授 有賀祥隆

監 修 東京国立博物館列品管理課登録室・貸与特別観覧室長 瀬谷 愛

会 期 令和5年 11 月 3 日(金)—11 月 18 日(土)

※16 日閉会を延長して開催。

会 場 奈良県 法隆寺 聖徳会館

【講演会】

講 師 東京国立博物館 瀬谷 愛

演 題 「法隆寺金堂壁画と鈴木空如」

主 催 大仙市太田地域自治組織連絡協議会

後 援 大仙市

期 日 令和5年 10 月 17 日(火)／ 午後1時 30 分～午後 3 時

会 場 太田文化プラザ多目的ホール

【特別番組】 空如～不変の美を伝えた画人～

企 画 大仙市

提 供 株式会社秋田銀行／株式会社寛文五年堂／株式会社タカヤナギ

放送日 令和5年 12 月 15 日(金)／午後 7 時～午後 7 時54分

出 演 東北大学名誉教授 有賀祥隆／東京国立博物館 瀬谷 愛

ナビゲーター 俳優 八嶋智人

ナレーション 俳優 高橋克実

制 作 秋田テレビ株式会社

制作協力 AKITA メディアテクノロジーズ株式会社

【特別展】 鈴木空如展—永遠の生命の芸術を求めて

主催 秋田県大仙市

会期 令和5(2023)年4月29日(土)

—5月14日(日)

会場 太田文化プラザ

出品数 67点(絵画等57点、書簡等10点)

観覧料 無料

鈴木空如生誕150年を記念した特別展を開催した。空如の画業の内、最もなのは焼損前の法隆寺金堂壁画を原寸大で3度模写したことである。本展では、空如筆「法隆寺金堂壁画」12点(6・10号壁画は東北歴史博物館へ貸出のため複製画を展示)の他、幼少期の作品、日清戦争へ出征し戦地台湾から実家へ宛てた書簡なども展示した。空如は戦地から帰還後、日本画会附属共立美術館で学び、明治31(1898)年に東京美術学校に入学する。本展では空如の若き日の習作や作品も展示した。

以上のように、本展では空如の画人としての歩みを幅広く取り上げるとともに、さらに、芸術家としての彼の苦悩と葛藤を紹介して、信仰と芸術を一体にしていくまでの道のりを紹介した。

また、空如は金堂壁画のほか、「金胎仏画帖」をはじめとする密教尊像の名品を中心に多数模写している。いまそれらは「聖尊図像」として保存箱に納められているが、その存在は世にほとんど知られていない。この「聖尊図像」の制作の取組についても紹介した。

・実績

入場者数 716人(1日平均:44.75人)

・団体見学

5月5日 東部5地域県文化財保護協会研修会 32人

5月10日 由利本荘市鳥海公民館 20人

5月12日 太田中学校 39人、太田北小学校 40人

・芳名録記載内訳(299人)

県内281人(うち大仙市132人、秋田市59人、仙北市26人、横手市17人、美郷町12人、由利本荘市11人ほか)、県外18人(宮城県6人、岩手県3人、青森県1人、山形県1人、福島県1人、東京都2人、埼玉県2人、神奈川県2人)

・ギャラリートーク

10回開催(4/29・30、5/3・4・5・6・7・10・13・14)

午後2時から30分程度

定員15名

掲載記事等

- ・秋田魁新報文化欄「生誕150年苦悩と葛藤をたどる—仏画家鈴木空如の誕生」2023年4月11日
- ・秋田魁新報県南地域「業績、生涯にスポット」2023年4月21日
- ・秋田魁新報地域ワイド「壁画模写など67点紹介—太田で記念展生涯と業績を伝える」2023年5月4日



展示概要

本展の構成は以下のとおり4章からなる。

第1章 若き日の空如

(1) ふるさとの記憶と日清戦争



(2) 東京美術学校前夜～美術学館のころ～

第2章 空如への道

(1) 東京美術学校へ入学



(2) 古画への眼差し～山名貫義との出会い～

第3章 そして空如になる

(1) 花鳥画の研究～苦悩の中で～



(2) 山陰・出雲地方への旅～「空如」と号す～

(3) 家族のこと

第4章 永遠の生命の芸術を求めて

(1) 法隆寺金堂壁面の模写



(2) 空如が私達に伝えたかったこと

第一展示室 (第1・2・3章)



玄関ホール展示 (第3章)



第二展示室 (第4章)



第三展示室 (第4章)



主な展示作品紹介（章立て順）

※展示キャプションを一部変更して掲載した。



山鳥の図（紙本着色、縦 38.5 cm×横 26.7 cm）

空如が10歳頃に描いたものです。

小学校の同級生門脇八五郎は後に「久治(空如)はさがし(賢い)人だった。人っ子(人物)描くにとても上手だった」と語っています。

絵には牡丹と黄色い鳥、さらに昆虫が飛ぶ姿が描かれています。構図は整理されていませんが、描写は子供の手とは思えない画力があります。



猫の図（紙本淡彩、縦 23.5 cm×横 31.7 cm）

空如の習作と伝えられている図です。

空如が動物画を描くことは珍しく、とくに猫を題材にした作は、本図と次の「猫とユキノシタ図」のほか確認されていません。

本図は、香箱の姿勢をとりこちらをじっと見つめています。猫の特徴である毛並みや柔らかさを、軽妙な筆致でよく描かれています。



猫とユキノシタ図（紙本淡彩、縦 82.5 cm×横 44.5 cm）

空如の習作と伝えられている図です。

本図の猫は耳をピンと立て、右前足を浮かせ、さらに後ろ足をかがめています。獲物にとびかかろうとする直前の動きを描いています。

また、背景にはユキノシタが描かれています。ユキノシタは庭に植栽されることが多く、いずれかの庭先での様子を写生したものと考えられます。



空如筆「法隆寺金堂壁画」より



文殊菩薩 (紙本淡彩、縦 156 cm×横 81.5 cm)

本図には「丁酉五月二十四日写之」とあることから、東京美術学校入学前の明治30(1897)年に制作されたものであることがわかります。

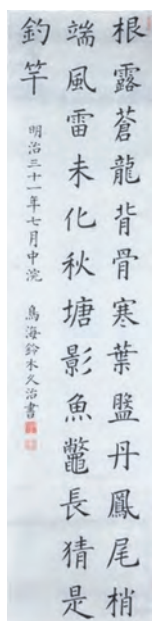
最近になり、空如は日清戦争から帰還後まもなく、日本画会附属共立美術学館に入学していたことがわかりました。このことから、この図は美術学館時代に制作されたものと判断されます。



仏眼仏母 (紙本淡彩、縦 196 cm×横 140 cm)

本図には「明治三十年丁酉五月二十八日写」とあり、これも東京美術学校入学前に制作されたものです。

原図は京都・高山寺所蔵の国宝「絹本着色 仏眼仏母像」(縦 197 cm×横 127.9 cm)です。高山寺を建立した明恵上人は幼くして両親と死別し、母への恋慕の情が強く、この仏眼仏母を「母御前」と呼び、母を追憶するための日常的に礼拝する仏として大切にしました。



書 (紙本、縦 132 cm×横 32.5 cm)

この書は、空如が東京美術学校入学前の明治31(1898)年7月中旬にしたためのものです。

空如はこの時期、書家・成瀬大域方を下宿先としていました。成瀬は、明治天皇に書を献上し、硯を賜っています。このことにより、賜硯堂と名乗りました。この書からは、空如が成瀬から書の手ほどきを受けていたことがうかがえます。

なお、「鳥海」の号が見えます。





梧葉・蝸牛 (紙本着色、縦26.6 cm×横38.5 cm)

本図には「明治三十年七月九日鈴木写生」とあることから、美術学館時代に描かれた静物画と考えられます。

美術学館時代に、空如が何を学んでいたのかを知ることができる、貴重な資料です。



胡瓜・桃・橘 (紙本着色、縦26.3 cm×横37.9 cm)

本図には「明治三十年七月十三日鈴木写生」とあることから、この図も美術学館時代に描かれた静物画と考えられます。

美術学館では、古画のほかにも日本画のさまざまな技法を学んでいたことがわかります。



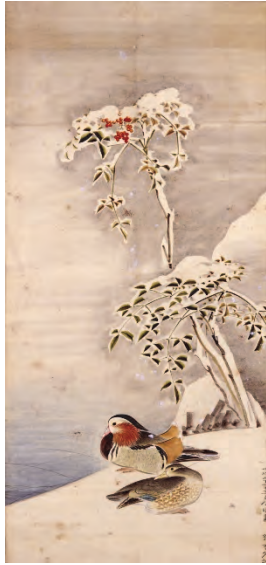
定智本 十二神将図 (紙本墨画、縦30.5 cm×横643.5 cm)

本図は、12世紀の絵仏師・定智が描いたとされる十二神将図の模写絵です。もとは京都・高山寺に伝わっていましたが、明治期以降、益田孝(三井財閥の発展に尽力、茶人)の所蔵となりました。現在は、一尊ごとに断裁され、ニューヨーク市 メトロポリタン美術館などが所蔵しています。

本図は断裁される前の姿を伝える貴重な模写本の一つです。



空如筆「法隆寺金堂壁画」より



池辺の鴛鴦 (紙本着色、縦 127.5 cm×横 59.5 cm)

本図には「明治三十二年十一月八日臨画 鈴木久治」とあることから、東京美術学校2年次に古画を模写したことがわかります。



群鳥 (紙本着色、縦 106.7 cm×横 56.1 cm)

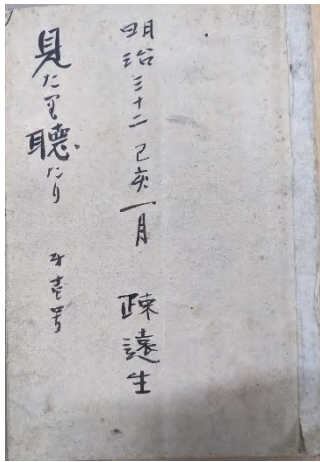
本図は、古画からの模写と考えられる図です。
13羽の水鳥のさまざまな表情が絵描かれ、見ていて楽しい図となっています。
花鳥画を学ぶ空如の姿をうかがい知ることができます。



鶉の図 (下図) (紙本着色、縦 115.1 cm×横 40.6 cm)

本図は、土佐藩絵師で維新後、東京美術学校教授となった日本画家・荒木寛畝(1831-1915)の添削を受けた下図です。
空如は「明治三十三年丹青会第一回出品下図 四月二十八日 荒木先生ミテ分目、添削を乞へシモノ」と記しています。

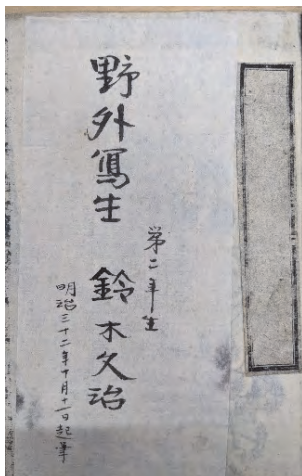




見たり聴いたり 第壹号 (丁数：22丁)

本帳面は、明治32(1899)年1月から、東京美術学校の授業などで、絵画制作について見聞きしたことを記したものです。

冒頭には、日本画を描く際のマニュアルが記されています。展示している箇所には、狩野派、土佐派で松の描き方に違いがあること。絵具の扱い方について、事細かく記されています。



野外写生 (丁数：53丁)

本帳面は、明治32(1899)年10月11日から始まり、空如が東京美術学校第2年生の時に制作されたものです。

東京美術学校周辺や箱根方面の草花や風景が描かれています。



縮図帖 第壹号 (丁数：49丁)

本帳面は、花鳥画・人物画などが描かれた写生帖です。

やまと絵の調度品や刀剣などが描かれており、空如が東京美術学校で具体的にどのようなことを学んでいたのかをうかがい知ることができます。



空如模「鳥獣戯画(甲巻)」より



六玉川 (井手の玉川) (紙本着色、縦42.3 cm×横59.1 cm)

「六玉川」とは、いずれも歌枕として知られる、井手(京都)・三島(大阪)・調布(東京)・野路(滋賀)・野田(宮城)・高野(和歌山)の玉川を言います。本図は、井手の玉川の場面を描いたものですが、空如かどの図から模写したのかは、いまのところ不明です。「六玉川」は画題として人気があり多くの作品が制作されています。



寢殿雪景 (紙本着色、縦45.5 cm×横56.7 cm)

画題を「寢殿雪景」と伝えられている図です。この図もいずれかの古画の模写と考えられますが、現在調査中です。



紫式部 (絹本着色、縦117.7 cm×横56.7 cm)

本図は、明治32(1899)年に制作されたもので、東京美術学校生徒成績品展覧会において第三等賞を受賞しています。

画題は、紫式部が脇息にもたれうたた寝する姿を描き、頭上に菩薩を描いて彼女の夢の中を描いたものです。本図は王朝の美と霊夢が表現され、見る者を幽玄の世界へと引き込みます。





薬師寺吉祥天像 (紙本着色、縦77.5 cm×横34.9 cm)

本図は、奈良・薬師寺に伝わる国宝・麻布著色 吉祥天像を模写したものです。空如の恩師・山名は明治22(1889)年頃に同図を模写しており、最古の作例です。

空如も山名の指導により、この吉祥天像を模写したと考えられます。なお、空如の模写は原図が修復される前のものです。

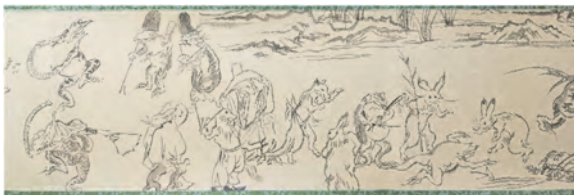


広目天・増長天 浄瑠璃寺吉祥天厨子扉絵

(紙本着色、縦115.5 cm×横30.0 cm)

本図は、東京藝術大学美術館所蔵の重要文化財・板絵著色 弁財天 梵天 帝釈天 四天王像七面のうち、四天王像の広目天と増長天を模写したものです。

ほかの五面も模写していた可能性はありますが、確認されていません。



動物遊戯画 (鳥獣戯画) 第1巻 (甲巻)

(紙本墨画、縦31.0 cm×横1148.4 cm)

本図の題箋には「動物遊戯画」とあり、国宝・鳥獣戯画四巻のうち、第一巻(甲巻)を写したものです。いずれの巻も詞書はなく、絵は墨のみで彩色は施されていません。甲巻は、ウサギやサル、カエルが擬人化され遊戯や法事を面白おかしく描いています。

空如は、古画の優品を積極的に模写していたことがわかります。



空如模「鳥獣戯画(甲巻)」より



百鬼夜行図 (紙本墨画、縦 32.5 cm×横 545 cm)

本図の題箋に「明治三十五年十一月模写」と張り紙をされていることから、空如が東京美術学校選科を卒業し、研究科に入学して間もないころに、模写したものであることがわかります。

原図は「土佐行秀」が描いたのもので、この人物は14世紀末に活躍したやまと絵師で、土佐派の隆盛を築いた一人です。



写生画 (紙本墨画、縦 39 cm×横 27 cm)

明治41(1908)年4月15日付けの兄実業に宛てた手紙に「現今は消化不良と睡眠不足のみと相成り、苦痛も大に減却致し」と体調は回復の兆しを見せつつも、絵の方では「風景の研究も相始め申度」と風景画の研究のため秋田に帰省したいと記しています。

実際、7か月余り帰省しています。本図は生家に伝来しており、その際に描かれたものと考えられます。



秋の七草 (絹本着色、縦 130.5 cm×横 51.3 cm)

本図は制作年不詳ですが、「空如」と書き印が記されていることから、大正2(1913)年以降の作と考えられます。

苦悩と葛藤中で、実家に7か月余り帰省して、花鳥画を学び直し、さらに、山陰・隠岐地方の古社寺巡礼を終え、心身ともに充実した後に制作されたものと推察されます。





童形地藏菩薩像 (絹本着色、縦98.0 cm×横49.9 cm)

空如は娘・豊子の追善供養のため、童形地藏菩薩を描きました。尊顔は、豊子に似せて描かれています。

また、菩薩の衣の文様は、豊子が好んだ野菊、なでしこ等の草花が描かれています。

さらに、この菩薩像は二枚描かれ、一枚は故郷の菩提寺に、もう一枚は、妻・なをが終生所持していました。そして、なをが没した後、生家で大切に保管されています。



法隆寺金堂壁画 (紙本着色、大壁 縦300 cm×横250 cm、 小壁 縦300 cm×横149 cm、秋田県指定有形文化財)

本図は、鈴木空如が昭和11(1936)年に完成させた三作目の原寸大模写です。空如は一作目を大正11(1922)年、二作目を昭和7(1932)年にそれぞれ完成させています。

いずれも金堂壁画が焼損する前に模写しており、昭和41～42(1966～67)年の金堂壁画再現事業の際には、二作目が参考資料の一つとされました。



法隆寺金堂壁画抜き写し (紙本着色、縦131.6 cm ×横59.4 cmほか、秋田県指定有形文化財)

本図は、鈴木空如が金堂壁画から一部分を抜き写したものです。100点が確認されています。

金堂壁画の図像を研究する上で、この抜き写しは一級の資料としての活用が期待されています。





金胎仏画帖 (金剛界諸尊形像) (紙本着色、縦 27 cm×横 39 cm)

金胎仏画帖は、両界剛界曼荼羅を描くための図像集です。本図は、金剛界諸尊形像(95尊)を写したものです。原本はもと熊本県・願成寺に伝来していましたが、昭和初期に持ち出され一枚ずつに分解され売却されました。現在は各地の美術館等で分蔵されています。

空如は分解される前に模写したと考えられ、95尊すべてが揃っており、当初の形をうかがい知ることができます。



五部心観 (紙本墨画、縦 36.5 cm×横 187.5 cm)

本図は、滋賀県の園城寺に伝わる国宝・紙本墨画「五部心観 (完本) 一巻」の写しです。智証大師円珍 (814-891) が中国・唐から持ち帰った図像です。

空如は、唐本白描図像の線の美しさにひかれるところがあり、模写したものと考えられます。



四種護摩炉形眷属図像 (紙本墨画、縦 38 cm×横 127.5 cm)

四種護摩炉形眷属図像は、空海が中国・唐から伝えたものです。現在、その原本は失われ、写本が京都・醍醐寺に伝わっています。

空如模写の本図は、醍醐寺本系とは別の新たな図像であることが、巻末の奥書きから確認できます。原図は「慈尊院」(高野山)の写本で、これまで知られていない写本であり、学術上きわめて重要な模写本になります。





安楽寿院 普賢菩薩 (紙本淡彩、縦 98 cm×横 53.5 cm)

本図は、京都・安楽寿院所蔵の重要文化財・絹本着色普賢菩薩像を模写したものです。

普賢菩薩が蓮華を鼻に巻く六牙の白象に右足を踏み下げて座り、両手で五鈷杵をのせた紅蓮華の長茎をとり、現世に現れた様子を描いています。



弘法大師像 (紙本墨画、縦 120 cm×横 114 cm)

本図は、空如の端書によれば、京都・梶尾山高山寺に伝来した、弘法大師像です。

図は、真言八祖像で描かれる空海の姿を描いています。

空海は、延暦23(804)年に中国・唐に渡り、唐僧の恵果から密教を学び、日本に伝えて真言宗を確立させました。没後の延喜21(921)年には、醍醐天皇から弘法大師の諡号が贈られています。



観音 (紙本淡彩、縦 101.5 cm×横 60.9 cm)

本図と同様の構図をとるものは、酒井抱一「観音」(三井記念美術館寄託)、谷文晁「慈母観音」(山形県美術館)があります。

本図には、空如の端書によれば「明治四十四年博物館より借用伝模」と記されています。博物館が現在の東京国立博物館であれば、原図は酒井・谷以外の図を模写した可能性があり、今後の調査が期待されます。



【特別展】 鈴木空如筆 法隆寺金堂壁画展

主催 秋田県大仙市
後援 聖徳宗総本山 法隆寺
関西テレビ放送
総監修 有賀祥隆（東北大学名誉教授）
監修 瀬谷 愛（東京国立博物館）
会期 令和5（2023）年11月3日（金）—18日（土）※16日閉会を延長して開催。
会場 奈良県 法隆寺 聖徳会館
出品数 19点（壁画12点、抜き写し6点、聖徳太子（唐本御影写し）像1点）
観覧料 無料

鈴木空如の生誕150年を記念して、法隆寺聖徳会館において開催した特別展。空如は焼損前の法隆寺金堂壁画を原寸大で3度模写し、さらに仏画の名品を数多く模写し後世に伝えている。

これらの画業から空如は「信仰と芸術を一体にした最後の人」と評され「現世の聖」とも称されている。

本特別展では、空如の最大の画業である「法隆寺金堂壁画」12点（三作目、1936年完成）とその抜き写しを公開し、焼損前の法隆寺金堂壁画を法隆寺・聖徳会館で公開した。

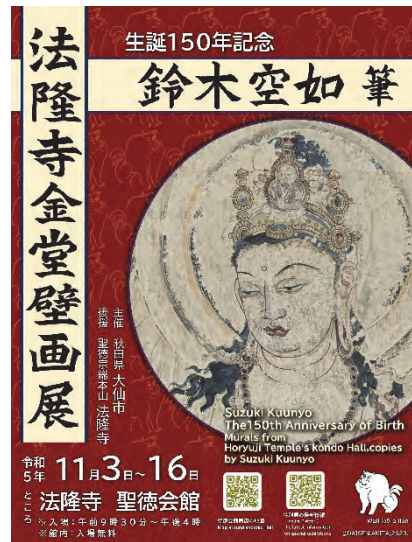
実績

入場者数 3,932人（1日平均約246人）

掲載記事等

- ・秋田魁新報県南版「空如作品法隆寺「里帰り」奈良、生誕150年展 3日開幕」2023年10月31日
- ・産経新聞地方版「金堂壁画模写の鈴木空如の偉業伝え 法隆寺で生誕150年記念展」2023年11月3日

- ・朝日新聞地方版「法隆寺金堂壁画の限定公開始まる 境内では鈴木空如の模写展も」2023年11月4日
- ・毎日新聞地方版「仏画家・鈴木空如特別展も開催 原寸大で模写した作品など、18日まで」2023年11月8日
- ・読売新聞全国版「法隆寺金堂壁画の模写展示—仏画家・鈴木空如生誕150年記念」2023年11月10日
- ・秋田魁新報県南版地方点描「転んでも」2023年11月21日
- ・聖徳宗教学部『聖徳 第251号』「法隆寺金堂壁画と鈴木空如」2024年1月26日
- ・斑鳩町『広報斑鳩』2月号「鈴木空如をご存知ですか」2024年2月1日



展示概要

本特別展における作品の配置について、監修者の提案により、法隆寺金堂外陣の壁画の並び順にせず、四方四仏の配置とした。

すなわち、東面は中尊に薬師浄土図(10号壁)、左脇侍(向かって右)に聖観音菩薩像(7号壁)、右脇侍(向かって左)に十一面観音菩薩像(12号壁)を配置、南面は中尊に釈迦浄土図(1号壁)、左脇侍に普賢菩薩像(11号壁)、右脇侍に文殊菩薩像(8号壁)を配置、西面は中尊に阿弥陀浄土図(6号壁)、左脇侍に勢至菩薩(4号壁)、右脇侍に観音菩薩像(3号壁)を配置、北面は中尊に弥勒浄土図(9号壁)、左脇侍に菩薩半跏像(2号壁)、右脇侍に菩薩半跏像(5号壁)をそれぞれ配置した。

各面の脇侍の配置について、諸尊像の首の向きを考慮した。例えば、西面で左脇侍を本来は観音菩薩像(3号壁)を配置すべきところに、勢至菩薩(4号壁)を配置した。

以上、金堂壁画の制作者が、金堂の間取りの都合で諸尊像を四方に配置できなかったであろうと想定して復元を試みた。なお、この展示の方法を「想定復元展示」とした。

展示あいさつ文

開催にあたり

特別展「生誕150年記念鈴木空如筆法隆寺金堂壁画展」にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。

本特別展は、法隆寺様のご理解とご協力のもとで開催させていただき運びとなりました。ここに厚く御礼を申し上げます。

さて、秋田県大仙市太田町出身の仏画家・鈴木空如は、法隆寺金堂壁画を原寸大で3度にわたり模写

いたしました。

空如が3度目に模写した法隆寺金堂壁画12面を今回展示させていただき、焼損前の金堂壁画の再現を試みております。

本特別展により、皆様が法隆寺金堂壁画の素晴らしさ、そして鈴木空如の純粋な生き方や想いを感じていただく機会となれば幸いです。

令和5年11月3日

秋田県大仙市長 老松博行

鈴木空如筆「法隆寺金堂壁画」展に寄せて

鈴木空如(1873—1946)は、現在の秋田県大仙市出身で「世に隠れたる真の画人」と称された日本画家で、今回の展覧会は、空如の生誕150年を祝って開催されるものです。

空如は73歳の生涯のうちに法隆寺金堂の外陣壁画大小12面を3組も模写しており、今回出品の模写本は空如63歳(1936年)の時に模写した第3作目に当たるものです。

法隆寺金堂壁画は7世紀末から8世紀初め頃に制作されたものですが、1949年1月26日に焼損し、現在では保存庫に収蔵されている焼損壁画としてしか偲ぶことができませんが、空如の模写本からは壁画の特色である鉄線描や凹凸画法などが目の^{あたり}親にみることができ貴重です。今回は、壁画の模写ばかりではなく、空如が壁画の細部を写し取った部分図も展示し見ていただくことにしています。

空如の金堂壁画模写展は、今迄に各地で開催されていますが、今回は金堂壁画の存在した斑鳩の里・法隆寺で始めて開催されることは、長年希望していたことだけに意義のあることに思われます。

令和5年11月3日

東北大学名誉教授 有賀祥隆

展示作品紹介

※『鈴木空如筆 法隆寺金堂壁画 鑑賞の壺』（2021.9、大仙市）を一部変更して掲載した。

第1号壁 釈迦浄土図



第1号壁は、画面中央に釈迦如来が宣字形須弥座（台座）に直接座り、右手は施無畏印、左手は与願印を結び、左右に脇侍菩薩各1体と各5人の比丘（仏教に帰依して、出家した男子）を配し、説法を行っている図と考えられます。諸尊（飛天と獅子を除く）は第9号壁・第10号壁と同数の13体です。

上辺に天蓋（笠状のもの）とその左右に飛天各1体、下辺には供物台を挟んで左右にさかさまにする唐草が描かれ、左右の岩座に座る獅子各1頭を、それぞれ対称的に描いています。

〈見どころ！〉

法隆寺金堂壁画はいつごろ描かれ、どこの国から日本に伝えられたのでしょうか。文字に書かれた証拠はありませんが、壁画の中に答えがあります。まず、画面左右下に比丘の足元にサンダルの紐が見えます。この形は、7世紀から8世紀の仏像・仏画にみられるもので、当時流行したものと考えられます。

また、おなじく画面左右下の獅子の尾の表現で、尾を折り曲げて後ろ足の間から跳ね上げる表現は、6世紀から8世紀初めにかけて中国で流行した形式です。

したがって、法隆寺は7世紀末ごろに再建されたことから、金堂壁画は7世紀末から8世紀初頭に中国から伝わったと考えられます。

第2号壁（右）／第5号壁（左）菩薩半跏像



第2号壁と第5号壁は、円形の円爾座に外側の左足を踏み下げて座り、右肘を膝上に突いて頬に近づけ、第1指と第3指を曲げ、その間に長い薄物の領巾（首にかけ左右に垂らした布帛）を通してあります。左手は膝頭に手のひらを伏せて突き、その指先の下に、下辺の宝池から伸びてきた長い紅蓮華茎を通してあります。

思惟（心に深く考え思ふ事）のポーズをとり「半跏思惟菩薩」とする見方もありましたが、現在では片足を組んでいることから「半跏」、または単に「菩薩」とすることが多くなっています。

〈見どころ！〉

法隆寺金堂壁画はどのようにして、漆喰の壁に描かれたのでしょうか。現在、その手法は伝わっていませんが、これも壁画からうかがい知ることができます。

まず、第2号壁と第5号壁をよくご覧ください。実は、この両壁画は全く同じ図像なのです。現在の研究では、紙に描かれた図像を漆喰の壁にあて先端の尖ったもので図像の線をなぞり壁にあたりをつけ、その後、着色したと考えられています。焼損した壁を見るとその線が残されています。

したがって、第2号壁と第5号壁は一枚の図像絵を引っ繰り返り返し利用したため全く同じ図像になったのです。

第3号壁 観音菩薩像／第4号 壁勢至菩薩像



第3号壁 観音菩薩像は、金堂の南面の東端にあり、西を向いて蓮華台に立っています。右手を下げ、未敷蓮華（開花まえのハスの花）を

持ち、宝冠に化仏（小型の仏像）があるので、観音菩薩であることがわかります。

第4号壁 勢至菩薩像は、金堂の南面の西端のにあり。東を向いて蓮華台に立っています。左手を下げて未敷蓮華（開花まえのハスの花）を持ち、宝冠に水瓶（水を入れる器）があるので、勢至菩薩であることがわかります。観音菩薩像と勢至菩薩は、阿弥陀如来の脇侍菩薩（仏の左右に立ち命あるものすべて助けるもの）です。

〈見どころ！〉

仏像・仏画には、如来、菩薩、明王、天部、羅漢・高僧、曼荼羅などがあります。如来は悟りを開いたため装飾具を着つけていませんが、菩薩は悟りを開いていないため装飾具を着けています。このように、如来と菩薩との違いはわかりやすいのですが、第2号・第5号壁画の菩薩のように名前がはっきりしないものがあります。

第3号壁画と第4号壁画も同じ図像を引っ繰り返り返しした図像ですが、宝冠に「化仏」「水瓶」のシンボルが描かれていることから、第3号壁は観音菩薩、第4号壁は勢至菩薩であることがわかるのです。

仏像・仏画にある仏が何を身に付け、何を持っているのか、注意深く見るといろいろな発見があります。



10号壁抜き写し
菩薩・神将



10号壁抜き写し
如来・菩薩手足

第6号壁 阿弥陀浄土図



第6号壁は、中央に下辺の宝池から長く伸びる蓮華に座る阿弥陀如来と、その左右に同じ根から伸びる蓮華に向かって右に観音菩薩、左に勢至菩薩が立ちます。そして、三尊を中心にして周囲に化生菩薩22体と化生童子3体の25体が左右対称に配されています。



6号壁抜き写し
阿弥陀如来背障部分ほか

阿弥陀は赤褐色の袈裟をまとい、胸前に転法輪印を結び（右手第1指と第2指、左手第1指、第3指を曲げ、手のひらを向かい合わせる）、左足を右の腿の上にする仏像・仏画表現では新しい座り方である降魔坐で座ります。

〈見どころ！〉

空如は、法隆寺金堂壁画12面に描かれた仏81尊のうち、向かって右の観音菩薩（左脇侍菩薩…阿弥陀如来の左側に立つ）が最もすばら

しい仏で、自身の終生の手本としたことが伝えられています。

この観音菩薩は1951（昭和26）年発行の10円切手となり、金堂壁画焼損後の文化財保存活動の啓発となりました。

また、中央の阿弥陀如来の後ろに豪華な障壁があります。これは、グプタ式背障（7世紀末～8世紀初に流行）とされるものです。本来は椅子の背もたれにあたる部分ですが、よく見ると宙に浮いています。

では座面と脚はどこにあるのでしょうか？

実は、第10号壁中央の薬師如来の台座に使われています。金堂壁画は中国・唐の最新の図像を取り入れて制作されましたが、制作にあたり調度品や装身具は分解して利用されたことがわかります。

第7号壁 聖観音菩薩像

／ 第12号壁 十一面観音菩薩像



第7号壁の聖観音は、頭上に化仏をつけた宝冠を着け、岩の上の蓮台に南を向いて立ち、右手を上げ印を結んでいると思われませんが確認することができません。左手は下げて未敷蓮華（開花まえのハスの花）の長い茎をとっています。

第12号壁の十一面観音菩薩像は、本面を加えた十一面を顔の両脇と頭上に配置した十一面観音です。

第7号壁と同じく、岩の上の蓮台に正面を向いて立ち、右手は下げ、中指は軽く曲げて金瓔珞（宝石・貴金属を金糸で連ねた飾り）をとり、左手は肩口に上げて開敷蓮華（開花したハスの花）花の短い茎をとっています。

〈見どころ！〉

日本で一番人気のある仏様の観音菩薩は御利益を期待され変化します。第7号壁も第12号壁も観音菩薩ですが形も名前も違います。

第7号壁と第12号壁は金堂内で向かい合って描かれており、第7号壁は観音で第12号壁は変化観音であることを示しています。

観音は密教が成立する前は、第7号壁のようにお顔が1面、腕も2本の1面2臂が基本の形で、観世音菩薩と呼ばれていました。密教が成立し変化観音（聖観音・千手・馬頭・十一面・不空罽索・如意輪・准胝）が成立すると基本の形を正（聖）観音と呼ぶようになります。

第7号壁と第4号壁は同じ図像ですが、第7号壁は第4号壁と違い、池の中ではなく、観音菩薩が住む補陀落山を意識して岩の上に描かれています。第12号壁も同様です。

第8号壁 文殊菩薩像

／第11号壁 普賢菩薩像



第8号壁の文殊菩薩は、宣字形須弥座に左足を踏み下げ、東を向いて座り、右の手のひらを上に向けて脛におき、左手は肘を曲げて、手のひらを外に向け第2、3指を立てています。上辺に天蓋（笠状のもの）が浮いています。

第11号壁の普賢菩薩は、蓮華を踏み分ける白象に左足を踏み下げ、向かって西を向いて座っています。右手は胸前で第1、2指を曲げ、第5指を立てています。左手は膝頭におき、手のひらを外に向け、宝相華の長茎をつかんでいます。この宝相華は、白象の鼻に巻きつき、前脚の間をくぐり腹の下を通り、臀部に出ています。

第8号壁の天蓋は動きはありませんが、第11号壁の天蓋は前（西）から風を受け普賢菩薩が前進していることをあらわしています。

〈見どころ！〉

第8号壁は「三人寄れば文殊の知恵」で有名な文殊菩薩です。普賢菩薩とともに釈迦如来の

脇侍菩薩です。文殊菩薩は獅子に乗った仏像・仏画で表現されますが、第8号壁は宣字形須弥座に座り、在家信者で知恵者の維摩居士の質問に答えるポーズをとっています。

第11号壁の普賢菩薩は、法華経信仰者を守るため東方浄妙国土から現世に姿を現した様子が描かれています。

壁画における文殊・普賢菩薩のテーマは、『維摩経』『観普賢経』にあるものですが、金堂の釈迦三尊像が聖徳太子を写した姿であり、太子がこれらの経典の注釈書（『維摩経義疏』『法華経義疏』）を書いていることから、文殊・普賢菩薩のテーマが選ばれたものと考えられています。

第9号壁 弥勒浄土図



弥勒如来は、画面中央に八角形の台座におかれた蓮華座に結跏趺坐し、右手は施無畏印、左手は与願印を結び説法を施しています。

弥勒如来の左右に脇侍菩薩・比丘各1体および神将各3体を描き、上辺には飛天各1体、下辺に金剛力士各1体を描いています。供物台の



9号壁ほか抜き写し

左右には獅子が各1体描かれています。諸尊（飛天と獅子を除く）は第1号壁と第10号壁と同数です。

焼損前のガラス原版を見ても、全体に剥落が激しく、図様のはっきりしない壁画です。

〈見どころ！〉

第9号壁は傷みがひどく、ガラス原版を見ても図像をしっかりと追えません。しかし、空如の模写は残された図像の線などを非常によく拾っています。

とくに、画面下の台座や供物台、獅子の部分はよく描かれています。第1号壁と同様に獅子の尾の表現が独特で、7世紀から8世紀にみられる表現技法であり、壁画の制作年代の推定の資料となります。

また、空如模写の第9号壁に関して、1作目と3作目の表現技法に違いが見られます。1作目は図像のみを拾っていますが、3作目は壁の色彩までも模写しています。

第10号壁 薬師浄土図



薬師如来は、画面中央に宣字形獅子座に腰を掛け、両脚を踏割蓮華に置きます。右手は胸前に第1・2指を曲げて、左手は膝上に仰げて透明な宝珠である無価珠を持っています。

説法をする薬師如来を中心に、左右に脇侍菩薩、比丘各1体、後方には菩薩各1体と神将各2体、手前に金剛力士各1体の諸尊（飛天と獅子を除く）13体からなり、第1号壁と第9号壁と同様です。

〈見どころ！〉

なぜ第10号壁を薬師如来とするのでしょうか？

これまで、左手に持っている無価珠を、薬師如来のシンボル（標識）である薬器と考え、この如来を薬師如来と考えてきました。

しかし、椅子に座る如来の多くは弥勒如来であり、また無価珠は諸仏共通の持ち物（持物）であるため、薬師如来とする決め手にはなりません。

そこで、現在の研究では、薬師如来が宣字座に両足をすぼめて座ること、両手の姿勢、如来が着る縁取りのある僧祇支（浴衣）の上に帯紐を結んでいることなど、中国の慈恩寺大雁塔にある8世紀初頭・唐時代の端正な薬師如来と極めて近いことから、第10号壁の如来を薬師如来としています。

【鈴木空如の模写について】

空如による法隆寺金堂壁画（大小12面）の模写の手法は、原寸大（縦3.1㍍、幅1.6～2.7㍍）で剥落もそのままに描く現状模写を基本としています。

空如は73年の生涯で3度も模写しており、現在、1作目（1922年完成）と3作目（1936年



1作目 第7号壁画「聖観音菩薩像」



3作目 第7号壁画「聖観音菩薩像」

完成）は大仙市が所蔵し、2作目（1932年完成）は平木浮世絵財団（東京国立博物館寄託）が所蔵しています。1作目は長年、箱根鈴木家（吉池旅館）が所蔵していましたが、吉池旅館会長 鈴木壯治氏は、模写本を広く公開し空如の画業と法隆寺金堂壁画のすばらしさを後世に伝えてほしいとの願いから、平成30（2018）年11月に大仙市へ「聖尊画像」（密教画像を中心とする模写絵、美濃判で2千枚余）と共に寄贈されました。

さて、1作目の模写の特徴は剥落の部分を朱線で囲み黄色で塗りつぶすなど（写真上）、鑑賞には不向きな表現技法を用いています。

これは空如自身の研究資料と考えられ、金堂壁画研究においては1作目が重要です。すなわち、6号壁画下部の化生菩薩・童子図（写真下）は、ガラス原版では鮮明に写しだされていませんが、1作目の模写絵ではそれがよく写しとられており、1作目が金堂壁画研究の上で重要とされる所以です。



1作目 第6号壁画下部

展示室（東面）



（北面）



（南面）



（聖徳太子像）



（西面）



鈴木空如筆「聖徳太子像」

（縦 110 cm×横 56 cm）大仙市所蔵

この聖徳太子像は高額紙幣の図柄となったことでも有名です。原本は独立行政法人国立文化財機構 三の丸尚蔵館に保管されています。

空如筆「聖徳太子像」は、原本の制作当初の姿を再現しています。

(抜き写し)



広報 (JR 法隆寺改札口 観光案内所ポスター掲示)



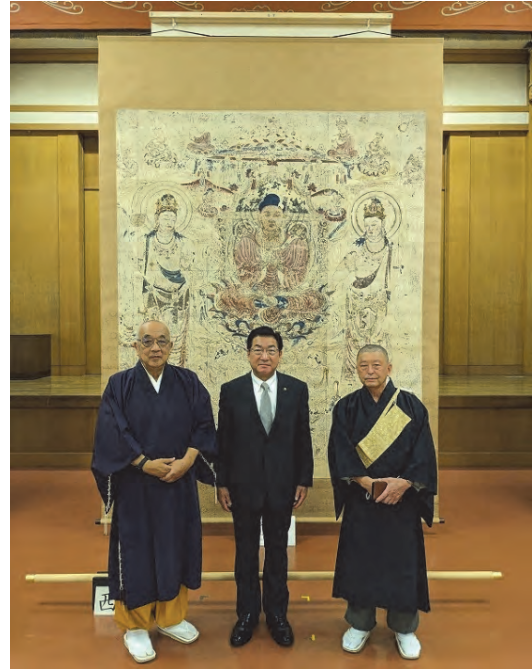
(法隆寺 i センターポスター掲示)



(見学者)



老松市長訪問 (11月4日)



開幕式 (11月3日)



※11月3日開幕式に出席予定であったが、公務のため翌日の訪問となった。

佐藤副市長訪問 (11月11日)



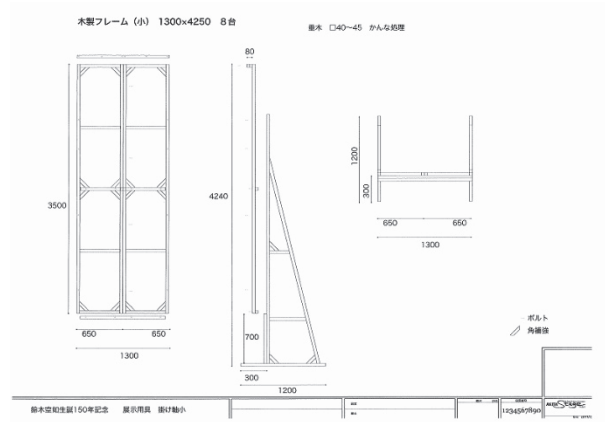
(開幕式参列者)



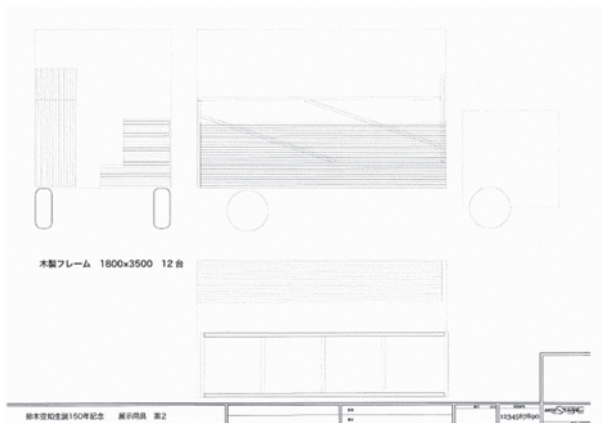
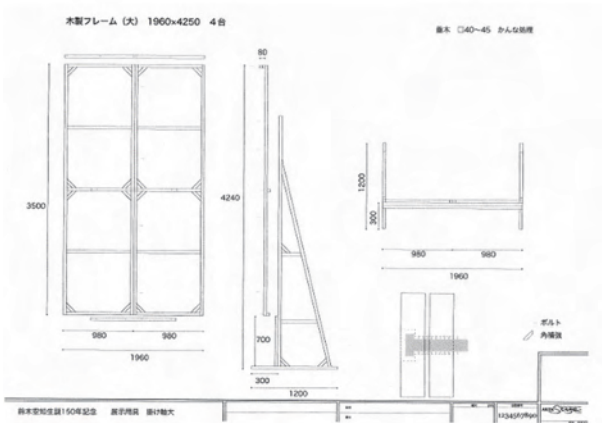
※同行者 観光スポーツ文化部 加賀部長

右から、法隆寺管長 古谷正覚氏、生家 鈴木覚氏、
監修 有賀祥隆氏、同 瀬谷愛氏、法隆寺執事長
大野正法氏

展示台



展示台設計図



展示台組立の風景



※法隆寺様の御厚意により、展示台組立及び撤去にあたり御坊の皆様から絶大なる御支援をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。

主 催 大仙市太田地域自治組織連絡協議会

後 援 大仙市

講 師 瀬谷 愛 (東京国立博物館)

期 日 令和5(2023)年10月17日(火)

会 場 太田文化プラザ多目的ホール

時 間 午後1時30分～午後3時

入 場 無 料 (先着150名)

鈴木空如生誕150年を記念し、日本絵画史が専門で東京国立博物館勤務の瀬谷愛氏から鈴木空如模写「法隆寺金堂壁画」の今日的意義について御講演をいただき、太田地域出身の偉人の一人である鈴木空如の魅力と、故郷の誇りと素晴らしさを再認識するために講演会を開催した。

実 績

入場者数 150人 (うち中学生80名)

掲載記事等

- ・大仙経済新聞(X版)「大仙で仏画家・鈴木空如の生誕150年記念講演 東京国立博物館の専門家が講演」2023年10月13日
- ・広報だいせん「だいせん日和」10月号に掲載
- ・太田地域内チラシ全戸配布
- ・秋田テレビ取材 放送日10月23日(月)「Live News あきた」



講師略歴

東京大学大学院博士課程中退。専門は日本絵画史。2003年より山口県立美術館、2009年から東京国立博物館に勤務。

現在、列品管理課登録室・貸与特別観覧室長。特別展「法隆寺金堂壁画と百済観音」(2020年)の主担当者。同展はコロナ禍のため公開中止となったが、鈴木空如筆「法隆寺金堂壁画」も出陳されていた。



令和5年10月17日
太田地域文化講演会

法隆寺金堂壁画と鈴木空如

東京国立博物館 瀬谷愛

はじめに

特別展「法隆寺金堂壁画と百済観音」2020年3月13日～5月10日

文化財の被災について

1. 法隆寺

- 601年 斑鳩宮造営
- 607年 聖徳太子、父用明天皇の病氣平癒のため
薬師如来像造立（法隆寺創建とする）
- 622年 聖徳太子薨去
- 623年 止利仏師、釈迦三尊像造立
- 663年 白村江の戦い
- 670年 落雷で斑鳩寺（法隆寺）全焼
- 693年 持統天皇、仁王会のため紫天蓋を施入

2. 法隆寺金堂壁画

飛鳥時代・7～8世紀、土壁着色

1) 主題

- 内陣壁画 小壁 飛天図 20面（現存）
- 外陣壁画 大壁 四方四仏と菩薩像 12面（焼損）
 - 第1号壁 釈迦浄土図
 - 第6号壁 阿弥陀浄土図
 - 第9号壁 弥勒浄土図
 - 第10号壁 薬師浄土図
 - 第2・5号壁 菩薩像
 - 第3・4号壁 観音・勢至菩薩像
 - 第7・12号壁 観音・十一面観音像
 - 第8・11号壁 文殊・普賢菩薩像

外陣栱間壁画 山中羅漢図（禪定比丘図） 18面 以上、計50面

2) 表現技法

鉄線描

凹凸画法

南齊（5～6世紀）謝赫『古画品録』画の六法

- ① 気韻生動：いきいきと ② 骨法用筆：確かな線で ③ 応物象形：正確な形を
④ 随類賦彩：適した色で ⑤ 経営位置：美しい構図 ⑥ 伝移模写：古画に学ぶ

3. 金堂壁画模写の歴史と鈴木空如（1873～1946）

明治 6 年(1873) **鈴木空如誕生**

17 年 桜井香雲（1840～1902）12 面模写

28 年 日清戦争に従軍

31 年 鈴木空如、東京美術学校入学

34 年 高村光雲引率にて奈良京都旅行

35 年 山名貫義逝去

37 年 研究科修了、仏画師となる

大正 5 年(1916) 法隆寺壁画保存方法調査委員会

1 作目模写開始か

7 年 田中松太郎による原寸大撮影

11 年 **模写完成か（1 作目）**

13 年 兄・実業逝去

14 年 長女・豊子夭逝

昭和 5 年(1930) **2 作目模写開始か**

7 年 **模写完成か（2 作目）**

3 作目模写開始か

9 年 法隆寺昭和大修理起工

10 年 便利堂による原寸大撮影

11 年 **模写完成か（3 作目）**

14 年 法隆寺壁画保存調査会

19 年 戦争激化により修理中断

20 年 金堂解体修理開始

21 年 **鈴木空如逝去**

22 年 模写再開

24 年 **金堂火災**

25 年 文化財保護法制定

【主催者挨拶】

太田地域自治組織連絡協議会

会長 伊藤洋一

会場の皆さん、こんにちは、太田地域自治組織連絡協議会・会長の伊藤洋一と申します。どうぞよろしく願いいたします。

本日は、「大仙市太田地域文化講演会」にお集まりいただき、誠にありがとうございます。

また、本日お忙しい中ご臨席いただきました、大仙市長 老松博行様、大仙市議会議員 金谷道男様、安達成年様、そして鈴木空如の生家ご当主、鈴木覚 様をはじめ、地域の皆様には、日ごろから太田地域の振興についてご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。

私たち太田地域自治組織連絡協議会は、太田地域24の自治会の代表者で構成され、元気な地域づくりのために、行政と協働で様々な活動を行っております。

本日の文化講演会は、今年が太田地域出身の偉人、鈴木空如の生誕150年にあたることから、これを記念し、東京国立博物館の瀬谷愛様からご講演していただきます。

瀬谷様は、絵画史がご専門で、2020年3月に開催予定だった、特別展「法隆寺金堂壁画と百済観音」の主担当、またこの11月3日から法隆寺聖徳会館で開催される「鈴木空如筆 法隆寺金堂壁画展」の監修者もされております。本日はお忙しい中、秋田まで来ていただきました。誠にありがとうございます。鈴木空如について、貴重なお話しをお聞きできるよい機会だと思

ます。

最後に、本日の講師をご快諾くださいました瀬谷様に心より感謝を申し上げますとともに、本日ご参集の皆様におかれましては、「鈴木空如」を見つめ直すきっかけとなる、有意義な時間となることを祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。

【来賓者挨拶】

大仙市長 老松博行

皆さんこんにちは。只今ご紹介いただきました地元大仙市の市長をしております、老松博行と申します。どうぞよろしく願いいたします。

まずは、本日は「太田地域文化講演会」にお招きをいただきまして、誠にありがとうございます。また講演会がこのように盛大に開催されますことを心からお祝いを申し上げます。

主催の太田地域自治組織連絡協議会の皆様におかれましては、日頃より、より良い地域づくりのため、本日の講演会をはじめ、様々な活動を行っていただいておりますことに、この場をお借りしまして厚くお礼を申し上げます。

さて、本日の講演会につきましては、先ほど伊藤会長からもお話がありましたけれども、太田地域出身の偉人の一人であり、鈴木空如の「生誕150年」の節目を記念して、東京国立博物館の瀬谷愛室長から「法隆寺金堂壁画と鈴木空如」と題して、ご講演をいただくということで、私も大変

楽しみにして参りました。私の全ての今日の予定をキャンセルいたしまして、これ一本で来ているところでございます(笑)。よろしく願いいたしたいと思えます。

鈴木空如筆の県指定有形文化財「法隆寺金堂壁画模写」は、昭和24年の法隆寺金堂火災で原本が焼損した現在、貴重な歴史資料として注目を集めております。

この11月3日からは、空如生誕150年を記念して、法隆寺聖徳会館におきまして「鈴木空如筆 法隆寺金堂壁画展」が開催される運びとなりました。

市といたしましても大変栄誉なことであり、しっかりと取組むこととし、いま準備を進めているところでございます。11月3日のオープニングセレモニーに私も参加する予定になっております。

本日の講師、瀬谷室長はこの「法隆寺金堂壁画展」の監修者でもあります。私たちがまだ知らない法隆寺金堂壁画のことや鈴木空如などにつきまして、ご専門であります絵画史から見た空如など貴重なお話しをお聞きすることができるものと思っております。

大仙市でも、ここ太田文化プラザを中心に特別展示を実施していますが、法隆寺での展示を契機に、ファンの拡大や、歴史文化ツーリズムの推進につなげて参りたいと考えております。

本日ご出席の皆様におかれましても、地域の宝であります「鈴木空如」の魅力の発信に引き続きお力添えを賜りますよう、よろしく願い申し上げます。

結びになりますが、本日の講演会により、この太田地域がますます活気あふれる魅力的な地域になりますこと、そしてその活気が大仙市全体に広まっていくことを心から祈念申し上げまして、私の挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

【講演録】

東京国立博物館 瀬谷 愛

みなさんこんにちは。お天気も良くなって、みなさまにご来場いただきましてありがとうございます。

東京国立博物館で日本絵画の研究者と共に、列品管理課で登録室・貸与特別観覧室という部屋で事務をしております。瀬谷と申します。よろしくお願い致します。

《拍手》

先ほど、市長の方から今日のご予定を全て返上してここにお出でいただいたというお話があって、非常にプレッシャーを受けております(笑)。

大仙市の皆さんにおかれては、日曜日にもう既に、のど自慢で全国区に大変に名前を轟かせておられると思うんですけども(笑)、今日は大仙市とくに太田地域の偉人である鈴木空如について、法隆寺金堂壁画との関りから、偉人といってもですね、偉い人と書いて偉人ですから、空如さんがどういう所が偉かったか、と私が思っているか、というところをお話したいと思っております。

今日のお話しを受けて、皆さんの方でまた空如さんについて調べたり、これまでいろいろお勉強なさってご存知の皆さん、それぞれの空如論があると思いますので、ご教示いただけたらと思っています。

〈はじめに〉

はじめに、私が鈴木空如、呼び捨てさせていただきますけれども、鈴木空如について勉強をはじめたのは、2020年の3月に東京国立博物館で開催予定だった「法隆寺金堂壁画と百済観音」という展覧会に向けての調査研究をはじめたからでした。それまでですね、東北大学の有賀先生、泉先生をはじめとして、鈴木空如についての研究それから仏画、法隆寺金堂壁画についてのご研究があるということは聞いてはいましたけれども、実際にどういう方だったかということについて調べはじめたのは、この展覧会がきっかけでした。

先ほどもご紹介いただいたように、この展覧会は2020年の3月の13日にオープンする予定で3月の頭には会場のセッティングも終えて、いまではYouTubeでどういう会場だったか見るができるんですけれども、「ぶらぶら美術博物館」の取材を受けて、「日曜美術館」の取材を受けて、いろいろな女優さんたちに見ていただいたりして、すべてセッティングが終わったところで、コロナの感染拡大が酷いということで、一日もオープンせずに中止となった幻の展覧会です。

ですので、オープンしなかったので東京国立博物館の歴代の展覧会のリストからも

消えているという悲しい結末になっているんですけども、私がそれまで準備してきたこの展覧会はまたいつかベンジしたいなと思っています。

その中で、ご紹介したいと思っていたのは、奈良の法隆寺にある金堂壁画というものがどういうものであったか、これは今は焼けてしまっていますので元どの様な姿であったのかということを知るためには、写真に撮ったり模写したりしてくれた多くの画家達の業績があってこそです。その内の一人が鈴木空如ということになります。

この展覧会にはあと二つ目的がありまして、もう一つは百済観音という国宝の仏像をご紹介すること、それから金堂壁画が、なぜこれほどまでに日本でよく語られて伝説化しているか、ということの理由をですね、展覧会でご紹介したいと思っておりました。

というのは金堂壁画というものは、今は焼けてどのような色であったか、どのような線であったか、ということがほとんど分からなくなっています。完全に損壊して無くなったわけ、焼失したわけではないんですけども、これをきっかけにして日本の文化財保護法という法律が成立しました。その文化財保護法の成立からこの展覧会はちょうど70年の予定でありました。

それで、文化財が焼失するということはどういうことかということで、ちょっと空如さんから話が一旦ずれるんですけども、最初半分くらい法隆寺と文化財の保護についてお話しをしてからのほうが、空如さんが

如何に素晴らしかったかということが、皆さんに伝わるかなと思っております。

2018年9月にブラジルのリオデジャネイロにあるブラジル国立博物館が、火災にあったニュースを覚えていらっしゃる方いらっしゃいますか。あまり全国的なニュースで長々と取り上げられたわけではないんですけども、これは文化行政に携わる者達には大変ショッキングなニュースで、しかも非常に身につまされるものでした。

ブラジルは、この前にオリンピックがありまして大変財政を投入したわけですけども、その前から国立博物館に対して、必要な予算をおろしていなかったということ、博物館の人達はずっと訴えていて、博物館の中に自動で動くスプリンクラーが設置されていないまま、ある日火災がおきまして、2千万点のブラジルの歴史を物語る文化財の9割が焼失しました。

これはですね、私達、日本の国立博物館でも少し前にうちの館長がですね、必要な予算がついてなくて大変厳しいことを「文藝春秋」に寄稿しまして大変に反響もありましたし、そのあと国立科学博物館がクラウドファンディングで博物館の運営の寄附金を募ったりということがあったんですけども、博物館、文化財はすぐにお金にならないからといってなかなか予算がつかないということがあります。

ブラジルではそれがこういった悲惨な結果になったということが一つありました。これが2018年です。

その半年後、2019年の4月にフラン

スのパリ、ノートルダム大聖堂でまた火災が発生しました。これは修理をするために、作業をしていたんですけども、夜中だったですかね、出火して木造部分が焼け落ちて、13世紀につくられたバラ窓とかですね、中に納められていた聖遺物とか重要な文化財は助け出されたんですが、一部焼失してしまったという事件、事故がありました。これを受けて日本の文化庁は、防災のための動き、防災の施策をですね、進めようということ、準備をするんですけども、この半年後、沖縄県的那覇市にある国指定史跡首里城跡でまた火災が発生しまして、この時には再建された首里城でしたけれども、ほとんどの建物が焼け落ちてしまって、再建された首里城の中に保管されていた16世紀、17世紀ころの漆器類とかですね、そういった文化財が焼失してしまったということがありました。

火災によって、重要な文化財が失われるともう完全に塵になってしまいますので、火災は非常に恐ろしい、文化財にとっては非常に恐ろしい災害であります。

〈1. 法隆寺〉

これと同じことが、法隆寺で戦後おきたということが文化財保護法成立に大きな影響を与えました。この時にはですね、その文化財保護法の話はまた後でしたいと思うんですけども、奈良の法隆寺、中学生の皆さんはまだ行ったことがないですね？、一般席の皆さんは法隆寺にはいらっしゃったことがあったり、なかったりですね。

奈良の法隆寺は、日本で最も古いお寺の

うちの一つです。聖徳太子がこのお寺を建てようと思って、推古天皇の15年目、607年頃に創建されたと言われてます。もともとはここは聖徳太子が住んでいた宮殿の辺りになります。

法隆寺の境内は非常に広くて、皆さんの席からは文字（スライド）がほとんど見えないと思うんですけども、向かって左側、西側が西院伽藍と言って、法隆寺がもともと建っていた、今も建っているんですけども中心部になるところです。向かって右側の東側、東院伽藍と呼ばれているお寺の境内は、聖徳太子の住まいがあった所になります。なので右側が聖徳太子の住まいでその跡地がお寺として整備されていて、向かって左側の西側は、もともとのお寺として整備されていて、お寺と言いますか礼拝所というか、から発展して大きなお寺になっていたという風に考えることができます。

主に私達が法隆寺と呼んでいるのは、この西側の西院伽藍の方でここに左の上の方に回廊でくくられた部分があるんですけども、ここに五重塔や今日お話にでる金堂があります。法隆寺の建物というのは、世界文化遺産で日本の世界遺産ではじめて指定されたものの内の一つです。

日本で最初に世界遺産に選ばれたのは、文化遺産が二つと自然遺産が二つなんですけれども、言える人いますか？文化遺産の一つは法隆寺、もう一つはなんでしょう？もう一つは姫路城です。17世紀の木造城郭建築ということで指定されていて、もう一つは世界最古の木造建築群ということで

法隆寺が指定されています。さらに自然遺産の方は、白神山地のブナの原生林と屋久島の屋久杉の原生林なので、どれもですね木に関係しているというのが日本にとって世界に誇れる遺産であるということが言えるかなと思います。

この（スライド）向かって右側が、金堂といってこの中に壁画が巡らされています。法隆寺は、最初に聖徳太子が住まいになる斑鳩宮を造営して、聖徳太子のお父さんの病気が治るように祈って薬師如来像を造ったのがその始まりと言われています。

その後、聖徳太子が亡くなってから止利仏師が聖徳太子の姿を写したという釈迦三尊像をつくる、このあたり如何にも歴史の教科書みたいな話ですけども（笑）、法隆寺が形を整えていくんですけども、663年に日本が初めて国際的な戦争に参戦しまして、当時の日本にとっては世界大戦だったと思うんですが、中国の唐と新羅の連合軍に対して、日本と百済が戦いを挑むということで白村江の戦いというのがおきます。

このあとに法隆寺が落雷で全焼しました。これは最初に法隆寺が記録上火災に遭ったことになるんですけども、『日本書紀』に「法隆寺に災けり、一屋も余ること無し」という記録がありまして、その落雷によってすべて焼け落ちてしまったということがわかります。これを受けて670年以降に、いまの法隆寺の伽藍が整備されたと考えられているんですが、年輪年代法といってこの金堂の建物に使っている丸太、柱、梁とかのこの丸太の年輪を数えたところ、金堂

の部材の中に660年代に伐採されたことがわかるものがいくつか入っていることがわかりまして、早めに伐採して取っておいた部材を使っただけかもしれないんですけれども、おおよそやはり660年代から70年代以降、このころに現在の法隆寺が整備されたということは間違いないだろうと考えられています。

これが法隆寺の本尊、釈迦三尊像です。聖徳太子の姿を写したということが、この大きな光背、背中に板がありますね、光背の裏に刻まれています。この金堂の中にですね、お堂の中にたくさんの仏像、木で造った仏像や金銅で造った仏像がおさめられています。この壁面に絵が描かれています。これを法隆寺金堂壁画と呼んでいます。

〈2. 法隆寺金堂壁画〉

この金堂壁画なんですけれども、金堂の中を上から見た図ですが、内陣と呼ばれている真ん中に一段高くなっている所の上に、仏像が置かれていて、四隅に四天王がいて、中央に釈迦三尊像があって、向かって右側に聖徳太子がお父さんのために建てたという薬師如来像、向かって左側に阿弥陀三尊像、その間に毘沙門天と吉祥天、全部で9体の仏像が置かれています。

一段下がった外陣と呼ばれるところは、ぐるっと歩き回れるようになっていますが、その壁面に第1号壁から時計回りに第12号壁までの壁画があります。これを金堂壁画と言いまして、1号壁、6号壁、9号壁、10号壁画がひととき大きな仏画になっています。仏画っていうのは、仏様

を描いた絵のことです。

その絵を写したものがあります。縦が3メートル位なんですけれども、これは東京国立博物館にある桜井香雲が写した模写を掛け軸にしたものですが、絵を撮影する写場の天井が4メートル位ありますので、この絵自体は3メートルを超える絵になっています。

これと同じものを鈴木空如は3セット生涯に写したことがわかっています。これが一枚目、二枚目、2号壁、3号壁、三枚目、4号壁、5号壁、6号壁、縦が3メートルありますからね、3メートル以上あります。7号壁、8号壁、9号壁、10号壁。11、12ということで全部12あります。

今お見せした桜井香雲という人の絵は、日本で初めて12枚写されたんですけれども、どうして手で書き写さなければならなかったのか、というと当時まだ写真が発達していなかったからです。写真があれば、いま私達だったらもう手持ちのカメラでパシャパシャ撮ってそれで済むこともありますし、映像で撮ったり、3D撮影したりということで、どんどんコピーを作ることができますけれども、明治時代にはまだその術がありませんでしたので、手でとにかく写すしかなかったというところもあります。

もう一つには、手で写すことによって、その技術がどのようなものであったのか、ということ人間が記憶して記録することができるという目的があります。

ですので、昭和10年の頃には、かなり精密な撮影で写真がいまも残っていますけ

れども、これは写真ですけれども、これと前後して鈴木空如は自分の手で書き写す、ということを繰り返していたことになりま

す。
なぜそこまでして手で書き写さなければならなかったのか、というところなんです、多分、鈴木空如さんは東京美術学校、上野にいま東京藝術大学という美術や音楽を学ぶ人にとっては最高レベルの教育が受けられる、国立大学がありますけれども、そこに鈴木空如さんは通っていました。当時、日本の文化財行政とか芸術に関わっていた先生達からですね、こういったことを教えられていたんじゃないかなと思います。

ちょうど、聖徳太子が生きていた頃よりちょっと前ぐらい、中国の南齊という時代に謝赫という人がいまして、この人が当時の中国でもうすでに古い絵について研究した記録を残しています。それによると、絵を描くにあたっては、六つの方法、大事な方法があるということを挙げています。

その一つ目、気韻生動と言って、その描かれているものが生き生きとしているように描かなければならない、みなさんにお配りしたレジュメの裏にありますので、あまり書き写さなくても大丈夫です。気韻生動、生き生きと表現しなければなりません。

それから絵というものは、骨法用筆、骨というのはその形ですね、形を支えるような線のことをいいます。筆を使ってその線をしっかりと、骨が無いみたいなグニャグニャした線じゃなくってしっかりと、骨を与えなければなりません、そういった確かな

線で描かなければならない、ということを言っています。

三つ目に応物象形、物に応じた形をしっかりと表現しなければなりません。

四つ目、随類賦彩、その種類に応じた色、適した色を塗らなければなりません。今の私達の芸術的感覚ですと、人の顔が青く塗ってあっても、そういうふうには光の影響で見えることもあるかな、と理解するようにもう教育されてますけれども、多分、この4番の随類賦彩というものは、そういうことはまだ言っていないと思います。そのものに応じた色を塗らないといけない。適した色を塗りましょう。

五つ目に、経営位置。その画面の中でしっかりと美しい構図が整えられていないといけない。どこの位置に何があってどこの位置に線がきて、どの位置に面があるか、空間があるか、それをこの一つの画角の中で美しくデザインしなければなりません、ということも絵を描くうえでの重要なポイントであると言っている。

六つ目、伝移模写。伝える写す模写する。私は今ここに古画に学ぶ、古い絵に学んでそれを模写するって意味だって書いているんですけども、今日ここに向かう新幹線の中で考え直して、古画に学ぶってということだけではないというか、そうじゃないなとちょっと考え直しました。恐らくこれは、皆さんもマンガやアニメを見たときとかに、こんなにうまく描けた方がいい、うまく描けるようになりたいなあ、と思ったときにまず写してみようと思うんですけども、しっ

かり形を見て写せるかというのが重要ですね。目で見ても脳で理解して認識して、それが手で描いたときにちゃんと形になって現れるか、これは1番から5番の全てに通じる技術になってきますよね。

ですので、見て正しく写し取れるか、というのが絵にとってすごく大事なことで、下絵でざっと描いたものが、本番で清書したときに全く同じく描けるか、という技術ってというのは非常に重要になってきます。

大体にして下絵は勢いがあって、生き生きとしてすごくよくて、それを本番で描き写すとなんか堅苦しいような、型崩れしたようなことになるということが多いのですが、それをまるで下絵の様な生き生きとした線で本番で描けるか。本番の紙、絹に描き写せるかというのは非常に重要な技術になってきます。

恐らく、鈴木空如さんはこの6番、特に意識して生涯研鑽されたんじゃないかと思っています。しっかりとした線を描く、しっかりと描き写すということは、スポーツでもそうですけれども基礎となる野球のスイングとか水泳のバタ足とか、そういったものがいつでも同じようにできるようになるのは難しいことです。大谷翔平が必ず同じスイングができる、再現性の高いスイングをするって言われていますけれども、それと同じことをいつでもできるっていうことが絵にとっても大事だということです。

法隆寺金堂壁画では十二面あるんですが、その内の例えば右下の2番と左下の5番の絵を抜いてみますと、こういう感じに

なっています。一面一面全部オリジナリティのある絵かという、実はそうではなくて同じ絵を左右反転して写しただけ、というものが含まれていたりします。これはズルをしたわけではなくて、恐らくお堂の中の左右対称性を意識して、ここの部分はこういった形をとることがこのお堂の中で美しいシンメトリーを生み出す、という計画があってこそなんだと理解しています。

金堂の仏像はいまさっき申し上げた9体しかないんですけれども、明治時代のお堂の中はもうちょっとお像が多かったようでして、本尊の裏側にまわるといくつか仏像があったという写真が残っています。この左側の仏像、シルエット見覚えのある方いらっしゃいますか？中学生にはちょっと難しいかもしれない。これは国宝の百済観音だと思います。だと思えますというか同じですので、それに違いないのですけれども、百済観音はいま宝物殿（大宝蔵院）がありましてその中に安置されているのですが、かつては金堂の中に本尊の裏側に立っていました。

百済観音と呼ばれているんですけれども、実際には百済で造られたものではないことが研究上わかってきています。江戸時代のある時に、日本は聖徳太子の時代に百済との非常に交流があって、そのあと白村江の戦いで日本と百済は連合軍を作ったということもあるので、これは百済で造られて日本に運ばれてきたと考えられるようになって、それ以来百済観音と呼ばれているのですが、現在はだいぶ研究が進んでお

りまして、この百済観音の手首とか二の腕のところはブレスレットをしているのですが、このブレスレットが法隆寺に伝わっている金銅製の幢、灌頂幡と呼ばれている幡と同じデザインのをここに巻いていることがわかっています。しかもこの材質が日本で古代によく仏像に使われていたクスノキを使っていることがわかっているので、これはもう日本で造られたものだということが定説となっています。

明治時代にはこれだけのものが金堂の中に納められていたのですが、戦後この金堂が焼けます。昭和24年1月26日の明け方に出火しているのがわかって消防隊が入るんですけども、しっかりと施錠されていたので完全に火が回って蒸し焼きといいますか、外から入れない状態になってしましまして、ホースを入れるところがないということで、壁画のある壁に外から丸太で穴を開けて、そこにホースを突っ込んで中を消火したということがありました。それで中が真っ黒こげになりまして柱ももちろん焼けますし、壁画は色を失ってしま残っているのは白黒の焼しめられた壁面になっています。

どうしてこういうことが起きたかと言いますと、法隆寺の全体です。建築物の修復を行いましようということで、昭和の大修理というのが計画されまして、その中で建造物に付随している壁画も修理しましようということで調査会が発足したんですが、第二次世界大戦が激しくなってきたことで中断して、戦後にこの金堂の解体修理

を再開します。

この時中に入っていた本尊、なんで焼けたのに昔のが残っているのかなと思われたと思うんですけども、この時全て外に運び出されていたのです。さらには建築の金堂の中心以外のところですね、この大きな壁画があるところ以外のものは、二階の部分と周りの部分は全部解体して移動されていたので、それも焼けずにいまも残っています。それがいま再建された金堂の上に周りにです。付随してあらためて建て直されている状態になっています。

この解体修理をして、壁画と中心となる柱だけを残した状態で金堂壁画の保存のための模写、日本画家達による模写が行われていまして、それを戦争で中断していたのを再開して2年後に火災に遭ったということになります。

これによってですね、日本の文化財行政というのは非常にいままで手薄であったということが、もう一度こう考え直さなければならぬということが議会でも話題になりまして、それまでは戦後の文化財の散逸とか荒廃が議題のメインだったのが、この金堂の火災の後に国宝の松山城が焼けて、そのすこし後に国宝の松前城が焼けてってということで、戦後の日本で国宝の建物が次々に火災に遭いまして、それによってもう文化財全体の法整備をすすめるってというのが、文化財保護法の制定に拍車をかけたという動きになっています。

〈3. 金堂壁画模写の歴史と鈴木空如〉

焼損した壁画は壁からはずされて、保存

処置をされました。合成樹脂を注入しておきえていくっていう作業がずうっと行われていました。この時の処置が、ここ数年ですね検証作業が行われまして、非常に壁画自体はいい状態を保っているということが確認されています。それから、今保管されている建物の安全性も確認できていますので、今後ですね一般の皆さんにもっと公開していこうという動きが進んでいます。

焼損した壁画、もうこの世にないと思われることがあるんですけども、実際には法隆寺の中にずうっとこの様に保管されていまして、黒焦げになった柱も焼けてモノクロになった壁画も、樹脂で固められて鉄の枠にはめられて収蔵庫の中で組み立てられています。ずうっと戦後からこの状態の中に入って見学することもできます。できますというか、時々法隆寺が主催となって見学ツアーをしています。近年ではこの整備をどんどん進めたいというのもあって、クラウドファンディング、寄付金をいただいたら中を見学できますということで、ツアーを度々組まれています。ですので、どなたでも、その機会に合わせて申し込めばですね見ることができます。

この部屋に入ると焦げたにおいがするような気がするんですけど、全くしないはずなんですけれども、物凄く苦くなるような空間です。是非機会があったら見ていただきたいなと思います。

これが焼けてしまって今モノクロですので、どんな色だったかということを知るのには、焼ける前に自分の目で見て色を塗っ

た画家達の仕事を見るしかないというのが現実です。写真もありますけれども、結局モノクロ写真でしかなくて四色分解したカラーで再現できるように撮影した写真もあるんですけども、それも結局最終調整は人の目で一度もカラーの壁画を見たことが無い人が最後色調整をするということになりますので、実際にはもうカラーを再現するということが非常に難しい状態です。

そうなりますと、一番古い模写を行った例えば東京国立博物館に残っている、この桜井香雲という江戸時代から明治時代に活躍した絵師が残した原寸大の模写を一つ頼りにするしかないというのがあります。

ただこの時には、あのお堂の中が真っ暗の中で写していますので、この色自体をもととの壁面色だと考えることは非常に困難です。実際に見てみると物凄く暗いんです。多分こうじゃないんだらうな、ということは私達も見えてわかります。

ただ例えば、こういう6号壁と呼ばれている阿弥陀浄土図の場合には、この阿弥陀さんの顔面のところが消火活動で穴が空けられてしまいましたので、こういった模写であるとか当時の写真でしかこの阿弥陀の顔を知ることさえできないというのが現状です。

この6号壁は、特に美しいと昔から言われていたんですけども、どうしてこの壁を選んで穴あけたのかなってというのは、文化財に関わる、文化財の業界では悔やまれるといいますか、よく話に出るんですけども、実際穴をあけているのは消防の方た

ちでそんな選んでもいられなかったと思うんですね、ここの裏は6号壁ですから穴開けないでくださいとか言ったらどんどん遅れてしまいますので、仕方が無かったと思うんですけれども、この6号壁はほぼ大破しているという状態です。それを樹脂で固めていましっかり壁として立っているわけです。

桜井香雲が明治17年頃に写したものと、鈴木空如がそのあと写したものと大正時代に写したものと、昭和時代に撮影された写真を並べてみます。

そうすると、桜井香雲の絵のこの阿弥陀さんの後ろのこの部分(背障)、桜井香雲のこの部分と一番右の写真の阿弥陀さんの後ろのこの部分だとこの違いがわかりますかね、絵具が減っているというのがわかりますか、アハ体験みたいですが、よよく見ると香雲のときと昭和の写真とでは絵具が剥落しているようにみえます。

空如さんと桜井香雲の模写はほとんど変わりはありません。どっちかっていうと空如さんと写真の間はかなり差がありますので、大正から昭和の間で何かあったのかなって思ってしまうと思うんですが、多分それほど深刻ではなくて、空如の模本は桜井香雲の模本に相当忠実に描いていると思います。

実際、これだけの金堂壁画が1300年保管されてきた背景には、江戸時代の中頃までこれが全く一般公開されていなかったということがあります。文化財の保護においては、皆さんから忘れ去られてはいけな

いんですけれども、やっぱり見せすぎても活用しすぎてもリスクがあるというジレンマがありまして、触ったら落ちるし、触ったら壊れる可能性があるということは一つあります。

鈴木空如さんのどんなところが偉いのかということなんですけど、先ほどの桜井香雲という人は日本ではじめて十二面全部を模写した人なんですけども、これは国の事業としてお金をもらってやっています。十二面すべてを模写してくださいということで、国の仕事として業務としてやっていて、どうしてそういう業務が発生したかということ、その前にイギリス人の外交官がどうも金堂に素晴らしい壁画があるというので見に来て、その内の一枚を模写させてイギリスに持ち帰りたと言った経緯があります。

それで桜井香雲が一枚だけ模写してイギリスに納めています。それはいま大英博物館に保管されていて、大切に展示もされています。その後ですね、すごく日本らしいんですけれども、外国の人がほめてくれたこれすごくいいじゃないか、と言って大急ぎで十二面写すという流れがありまして、それで桜井香雲が十二面すべてを写してそれが博物局に入って、いま国立博物館に納められているという経緯があります。

一方で鈴木空如は、何故十二面を模写したか。しかも3回模写しています。どうしてか、ですね。これ皆さんの街です。特別展、いま幻となった特別展にちなんで何度も私講演会だけしたんですけれどもその度にこれを写して皆さんに紹介しました。ス

キー場の上ですよ。スキー場の上から撮った街の風景です。

展覧会のためにこちらのまさにこのお部屋で、空如さんの模本の撮影にも来ました。図録に掲載させていただくんで来たんですけれども、これ見て大ききわかりますよね、この天井に対してこれをかけるとこんなに大きいんですね。なのでカメラマンもすごい引いて梯子に上らないと撮影できないというような大ききでした。

これを一人で三十六枚描いたっていうのはそれだけで偉いと言えるかなと思いますけれども、もっと偉いことがあります。いままでの研究者のみなさんの成果によって、それぞれいつごろ書き終わったかというのは、もうおおよそわかってこれがもう定説化していいんじゃないかなと思っています。

一作目は大正11年頃には描き終えている、二作目が昭和7年頃に描き終えている、三作目は二作目の直後に間髪入れずに描き始めて昭和11年に描き終えています。やっぱり少しずつ描き方を変えていて、空如さんの中での金堂壁画理解がどんどん進んでいったということもありますし、一方でこの模写を写して自己満足するだけじゃなくて人にどんどん見せなきゃいけない、という使命感が絵の仕上がりに影響を与えていったということがあると思います。だんだん人に見せる用の描き方になっていく、整っていくというのがあるのかなと思っています。それは空如さん自身の技術も向上していたと思いますし、どのように作品を

持っていくかという意識の問題でも、コンセプトの問題でもあったと思います。

どうして空如さんが、この金堂壁画の模写にこれ程のめり込んでいったのかな、というのがあるんですが、人生で金堂壁画だけを写していたわけではないんですね。この大仙市には空如さんが残した沢山の作品が残っています。それはあの金堂壁画の資料なんていったらあれですけど、金堂壁画よりもずっと多い比喩物にならないくらい沢山の仏画を写したり、制作しています。今までは、金堂壁画を模写した人というイメージが強かったんですけども、今後はそれ以外の仏画制作、作品制作や模写作業、模写の活動に注目することですね、空如の模写にしかない記録というのが相当含まれているということが、だんだん見えてくると思います。

そういったところに視点を移して、研究を進めていくともっとですね、空如の偉いところっていうのが、どうして彼が人生を尽くしてここまでやったのか、というところも見えてくるのかなと思います。

空如さんは生まれて最初に画家を志しますけれども、戦争に行って非常に辛い経験、人の生き死にを沢山みて来られたわけです。その後、東京美術学校に進んで高村光雲って聞いたことありますか？東京国立博物館に老猿っていう大きな猿の木彫があるんですけども、老猿とかですね近代の彫刻家の中では非常に有名な作家ですが、高村光雲の引率で奈良・京都に修学旅行に行っています。そこで初めて金堂壁画を見

て衝撃を受けて、これはすごいとこんなものがあるのかということに衝撃を受けて、恐らくそれまでも仏画に対して興味があったと思いますけれども、山名貫義という日本画家の先生に薫陶を受けたりですね、大村西崖という東洋の仏教史に強い先生の指導を受けたりして、仏画について研鑽を深めていきます。

日本画家、当時もいまもそうだと思いますけれども、絵を描いて絵を売って生きて行くことは非常に難しいことです。それでもですね、空如さんはご実家の支えもあって売り絵っていうんですかね、売れそうな絵をどんどん描けばですね、やっぱり売れて生活は潤います。美しくてみんなが家に飾りたくなるような、イルカの絵をかいたらたくさん売れて生活が潤います。でも自分が描きたいのはこんなじゃないのになって思ったときに、イルカじゃなくて私は仏様を描きたい、でその絵の中に自分のサインは入れたくない、仏様は仏様だからみんながそれを拝むんであって僕の名前を拝むんじゃないんだと思ったときに、あんまりそこにこう集中すると絵がやっぱり売れなくなってくる。そういうジレンマが画家にはあると思います。

私達でもこういう展覧会をやりたいけれど、人を入れないといけないから、人が入る展覧会をやんなきゃいけないとかある訳です。そこをこううまくバランスをとって社会人としては生きていかなきゃいけない所があると思いますけれども、空如さんのすごいところは、すごく信念がしっかり

している。それを支えてくれたご家族もありますし、理解のある先生や同志がいたということもあると思います。

大正5年に法隆寺壁画の保存方法調査委員会ができて、ここで近代的な保存科学の成果をドイツやヨーロッパから輸入してですね、この壁画を保存しようという活動が日本ではじまります。どうもその頃、空如さんもその国の動きを受けて一作目の模写を開始したという風に考えることができます。

この国の委員会では、オーストリアで写真技術を学んできた田中松太郎という人が原寸大の写真撮影をされていて、もうこの時点で形を残すということ自体については画家の技術は必要なかったと考えることもできるかもしれません。ただこの時点ではモノクロ写真でしかありませんので、やはり人が写してどの様にしたらその表現が実現できるかということ画家自身が体に染み込ませていく必要があったわけです。ただ、この時には国による画家の模写活動はなされていませんでした。

空如さんだけが自力で模写活動をはじめています。どうも空如さんは、法隆寺に通って公式に写させてもらったわけではなくて、恐らく博物館の桜井香雲の模写を見て写すことをはじめているんだと思います。というのは、法隆寺はお寺に来た人の記録をかなり詳細に残していて、その中に空如さんが公式に訪問したっていう記録が見当たらない、どうしても無いみたいなんですね。となると公式に来たわけではなく

て、個人的に来て金堂の中で観察して写してということを繰り返していた、という可能性が高いわけです。そうしたご自身で模写活動を進めていく中で空如を支えてくださったお兄さんが亡くなって、お嬢さんも5歳の若さで亡くなるっていう悲しい出来事が続きます。

このころにはかなり長い間、神経も患っていたということもあって、空如さんの活動自体が心身ともになんかきつくなっているんじゃないかなと感じることもできます。

空如さんはお友達に宛てた手紙の中で、この金堂壁画についてこのように言っています。「本邦最優等の古画にして世界的珍宝たる絵画を古色幅員そのまま伝模して真の篤志家に拝さしむること」が私の目標であるということです。現代語訳すると「私達の国で最も素晴らしいランクの古い絵であるとともに世界的にも珍しい宝である。」この金堂壁画と同時代の中国・唐には、この金堂壁画よりも立派な壁画があったという記録がありますが、全く残っていません。東アジアの中で法隆寺の金堂だけに、それが近現代まで残っていたわけです。

空如さんが生きていた時には、まさに本当の意味で残っていたわけですので、世界的にも珍しい宝であるこの絵画を、「古色」古びた色はそのままに、「幅員」大きさですとか数、大きさや数もそのまんま、もうそれを古い色のまんま、そのまんま写して本当に志のある心の篤い人に見せたらきっとその人の心が動いて、文化財やこういった金堂壁画の保存に力を貸してくれるんじゃないか、そういう人がどんどん増えるんじゃないか、それは経済的にもそうですし、

金堂壁画ってこうあるんだよ、こんなにすばらしいんだよ、と1人が5人の友達に伝えればどんどん伝わる訳です。そういった事を広めたい。そのためには、空如さんが3セット、1セット写せばその1セットを見た人が千人いたら千人に伝わりますけど、3セット写して3か所で発表したら3千人になる。もっと増えるかもしれない。どんどんそういうことをしたい、そのためには心が動くような感動させられるような模写をしなければならない、というものすごく理想の高い活動をしていたんだと思います。

その後も空如さんは2作目を昭和5年に開始してまして、これを終わったところですぐに3作目の模写を開始しています。このころにはもう常に金堂壁画を模写し続けている状態になっています。それと同時に国でもまた法隆寺の事業がはじまっています、これは先ほど紹介した昭和の大修理になります。この昭和の大修理では再度原寸大の写真撮影が行われて、空如さんが3作目の模写を完成させた後に、法隆寺の壁画の保存調査会というのが発足しまして、法隆寺の壁画を全面模写しようという動きがあります。これは日本画家、東京藝術大学を中心とする日本画家の人達をあつめて12面の模写事業をしましょうということなんです。

空如さんからしてみればもう3回終わってるけどって思っていると思うんですけども、それを国としてしっかりやりまし

ようというのがあったわけです。

その事業では、4人の日本画家をチームリーダーとして集めて4枚の大きな壁面の模写、それから2面ずつ小さい壁画を模写するという4チーム構成で動き始めることになります。

ただですね、この時にそれをどのようにして写すのかというので、意見が相当わかれまして、きちんと原寸大の写真撮影をしたんだからもうそれをプリントアウトしてそこに色を付ければいいじゃないかという意見が大多数になりまして、4チームあったうちの3チームは写真の印刷に色を付けるという方法をとります。ただその内の1チームだけは、それでは全くあの壁画の良さが写せないというこだわりを見せまして。鈴木空如さんじゃありませんよ、もう一人そういう人がいたんです。そんなんじゃ全然だめだと。やっぱり伝統的な画家の技術を使って写さなければならぬということ、写真を利用はするんですけどもそれから形だけは「敷き写し」といって上からなぞるような形で線だけは利用するけれども、写真にそのまま塗り絵するようなことはしない。といってこだわり抜いたチームがありまして、三対一でそのまま、この事業が進んでいきます。

ですが、このころに空如さんがこういうことを言っています。「霊画に対し何等の信念もなき、ありふれの小手先大家が一時的出来心の応募であったとしたならば、此の崇厳無比精妙流麗大場面の偉業がたとへ総掛りにせよ完全に写し了ふせるものなるべ

きか」と言っています。ちょっと難しいですよ。霊画、スピリチュアルな素晴らしい絵に対して何の信念もない小手先の大先生たちが寄ってたかって出来心でやったとしても、まったく写し終われるわけがないよねということです。物凄い自信ですよ。3回写していますからね。空如さんじゃないと言えなかったセリフだと思います。

実際この1年後、空如さんはこういうことを言っています。「官の模写計画はじまって早や一年余り何等の消息を聞かず」一年経っているけれど何にも聞こえてこない。

「日過ぎて一幅の完成を見ぬ間にすでに休止の報を知り来るものが来たの感あり」、一幅も完成していないのにすでにちょっと休止しますっていう知らせがあったのを聞いてやっぱりなと思ったということです。実際に戦争が激化したことを理由に画家達も戦争に引っ張られてしまったということもあって、模写や修理が中断します。その後、戦争が終わって戦後もう一度修理事業が始まります。ただですね、模写が再開したのは2年後、戦後2年経ってからで空如さんがその前に亡くなりました。結局、国が模写するといったのにほとんど終わりも見ないままなんだっただろうというところで、空如さんは多分、複雑な思いだったと思いますけれども、亡くなってしまいます。

模写が再開されたのが2年後、戦争が終わって2年後ですがにもう戦前からずっと引っ張ってきた模写事業をこれ以上延期できませんということで、昭和24年中には必ず完成させるという厳命が国から下り

ます。それで昭和24年の1月ですね、それまでは春と秋の気候の良い時期にだけにしか作業をしていなかったんですけども、寒いとか暑いとか言っていられないから冬場も模写作業してくださいということになりまして、1月に作業をしていたところ、出火して全焼してしまった、ということでした。

実は空如さんと同じように、非常に信念を持って模写をしていた、手書きで模写をしていた入江波光という京都の日本画家がいるんですけども、この入江班のリーダーもですね、非常にこの模写には思い入れを持っていて、この金堂壁画のプロジェクトに入ってから自分の創作活動は一切中止して、白装束で身体を浄めてこの模写活動をしていたということが知られています。

空如さんと本当だったら話がとても合ったろうと思いますし、実際、出来上がった入江班の作品模写は非常に素晴らしいです。全然違います。写真に塗り絵したものと。入江波光という人の写した手書きの模写はものすごく美しいです。清々しい壁画です。ほんとにこんなに綺麗だったんだろうなと思わせるようなものになっています。

ただこの入江波光も金堂が焼ける前に亡くなっています。なんか不思議なんですけれども、空如さんも波光さんも思い入れのあった二人が焼ける前に亡くなっている。逆に焼けるところに出会ってしまっていたら、二人は堪えられなかったんじゃないかなって思うような偶然です。結局この昭和

の模写は焼けたことによって8面までしか終わらずに完全に中止になっています。

その後、金堂の再建に全ての力が注がれるようになりまして、焼損前の模写事業に関わっていた若い世代の人達が戦後大家になっていたのも、その人達を中心となって再現壁画というものを制作します。前田青邨ほかですね平山郁夫さんもその若手のチームの中に入って制作しまして、それが今金堂の中にかけてられています。鎌倉の自宅、前田青邨の自宅ですね、空如さんの模本をみんなで勉強しているところです。左の手前が平山郁夫先生です。

実際に金堂の壁画をちゃんと見て写したものが次の画家たちの教材になっていく、もし空如さんがそういった活動をしていなかったら、このとき教材として学ぶものが一つ少なかった、一つどころじゃないですね沢山失われていたわけですけども、自分の活動が次につながっていった、大きくつながったことが空如さんの一つの偉人たる所以だと思います。再現壁画が完成した暁にはですね、東京国立博物館で桜井香雲、鈴木空如、それから昭和の模写と再現壁画を並べた展示会が行われています。

歴史の中で何回か写されるという機会があったわけですけども、江戸時代からですね、どの様な人がどの様なきっかけでどの様なお金を使ったのか、みんなそれぞれ様々、全く違います。どの様に伝わってきたかという場所も全く違うわけですけども、この金堂壁画がとにかく素晴らしいことに心を動かされてみんな活動してきた

わけです。

2019年に大英博物館で桜井香雲が一番最初に写した模写が展示されたということがありました。私も9月に先月ですね大英博物館にいつてきましてこの模写をもう少し詳しく調査させていただきました。東博で保管しているものとは全く違って、すごく鮮やかでしたし、やっぱりイギリスに納めようと思って綺麗に仕上げたのかなっていう、画家のそれぞれの思いの違いも感じることができました。

それからフランスのギメ東洋美術館にも「モリモトシンザン」という人が描いたという記録がある阿弥陀浄土図模本があります。これもどういった画家なのかということとはほとんどわかっていないんですけれども、金堂壁画というものがかつて美しい状態で存在していたということをそのまま写して広めようとしていた、それを求めている人達が沢山いたということがわかります。

みなさん岡倉天心という人の名前を聞いたことがありますか。近代の文化財行政とか美術芸術の分野でいろいろな影響を与えた人ですけれども、岡倉天心という人が、よく周りの人に言っていた言葉があります。「まだ法隆寺の壁画を見たことが無い人は幸せだ。あの素晴らしい最初の驚嘆をこれから味わう機会をもっているのだから。」、見たことが無い方は、これから最初のファーストインプレッション、最初の出会いをこれから楽しめるんだからいいなあ、という、多分岡倉天心も強烈な出会いですごく

うれしかった、素晴らしいと思ったんだと思います。

私も最初に焼損壁画を見たときすごく怖いと最初思いましたけれども、よおく見ると線はまだ生きていますし、その美しい空間というのは、もとの美しい空間を想像できるくらいの強さが、焼けた壁画の中にまだ残っています。なので物凄く感動いたしました。こんな素晴らしいんだったら、さぞ昔はもっと素晴らしかったんだろうなと思いました。

ですので、まだもし壁画をご覧になったことがない方がおられればですね、きっと素晴らしい出会いになるでしょうし、空如さんがなぜ人生を掛けてそこまで入れ込んだのかということも、理解いただけるかなと思います。

かなり時間が押してしまって申し訳ありませんでした。今日のお話はいったん締めさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

《拍手》

【質問】

若松：大仙市刈和野の若松と申します。瀬谷先生、空如先生に関するご講話ありがとうございました。

先ほどですね、入江波光画伯のですね話題が出ておまして、実は私先日、入江波光のですね種々の仏画をみて非常に感動を受けて参りました。同じく村上（華岳）画伯の観世音菩薩の仏画もみて感動を受けてき

たのですが、空如画伯は京都の画壇の人達にどのような影響を与えてあったのか、そこら辺のところ先生ご存知のところお話し願いたいと思いますし、それからこれ余談ですけども、あの東博の館長さんは秋田出身の方ですし、それからこの夏の暑さにはですね、シンボルであるユリノキは順調に育ってあったでしょうか。そのことを一つお伺いしたいと思います。

瀬 谷：入江波光さんの作品を御覧になったということでほんと素晴らしいですよ。物凄い技術の高い方だと思いますし、信念のある方だと思っています。大変申し訳ないんですけども、空如さんが入江波光はじめ京都の画家にどういう影響を与えたかというのを、私不勉強でまだよくわかっておりません。

ただ、空如さんはどうも所謂、画壇活動というものを嫌いになっていたようで、画家同士のお付き合いを余り深くされていなかったようですね。ですので、その辺りがどうだったかというのを中々探し出すのが難しかったものですから、これから意識して勉強して、そうですね今度の展覧会までの間に反映できるようにしたいと思います。

あと、うちの館長がですね少し前にかわりまして、秋田出身の銭谷眞美から藤原誠になりまして、銭谷館長はですね本当に博物館の運営に熱意のある方で、昼休みにですね展示室をまわってご覧になるという方でした。何かおかしいところがあると、あ

れどういうことなのわかりにくいんじゃないのって言って一つひとつですね、私どもにフィードバックしてくださるような、珍しい館長でしたので、いまはちょっと寂しい気がしておりますけれども、新しい館長の下でまた新たに頑張っております。

それからユリノキは元気です。たくさん花を咲かせておりますので、またお出で下さい。

冨 木：太田中学校3年の冨木七虹です。このあと鈴木空如を引き継いでいくためには、私達ができることはありますか。

瀬 谷：ありがとうございます。そうですね、鈴木空如を引き継ぐってどういうことかなっていうところをまず考えるといいかなって思っています。鈴木空如がしたことと同じことをする必要はないというとなんですけども、絵を描けば引き継ぐことになるのかというところやっぱりそうじゃないと思うんですね。

鈴木空如さんは絵を描くことを通じて文化財とか日本の文化とかを残すことを実現したわけです。なので皆さんそれぞれ得意なものとかあると思うんで、文章を書く人は文章で、絵を描くことが好きな人は絵を描くことで、スポーツでも科学技術でも、子どもを育てたり介護したりいろいろな仕事がありますけれども、それぞれの仕事で熱意をもって日本と日本の文化や文化財をですねどのようにして守っていけたらいいかということ、空如さんに照らし合わせ

ながら、活動していってもらえたらいいのかなと思います。

冨木：ありがとうございました。今日は鈴木空如のことを知れてよかったです。太田に生まれてきた一員として、空如の歴史を大切にしたいと思いました。ありがとうございました。

芳賀：太田中学校3年の芳賀遥です。瀬谷さんがお仕事をしている上で大切にしていることがあったら教えてください。

瀬谷：難しいですね(笑)。あまり大きなことはできないなと思っているので、与えられた機会や自分の立場といいますか、そういうものには誠実に精一杯勤めていきたいなと思っていますし、できるだけ、きれいに温かく仕事をしていきたいなと思っていますけれども、空如さんの様に信念だけで生きていく強さがないものですから、時にはうまく流されながら、仕事をしていきたいと思っています(笑)。みなさんはまだそういうふうにならないように、今は真っすぐにお勉強頑張っていたいただきたいなと思っています。

芳賀：ありがとうございます。鈴木空如については、知らないことがほとんどでしたが、今回の講演で詳しく知ることが出来てよかったです。

【特別番組】 空如～不変の美を伝えた画人～

企 画 大仙市
提 供 株式会社秋田銀行／株式会社寛文五年
堂／株式会社タカヤナギ
放送日 令和5(2023)年12月15日(金)
午後7時～午後7時54分
出 演 有賀祥隆(東北大学名誉教授)
瀬谷 愛(東京国立博物館)
ナビゲーター 俳優 八嶋智人
ナレーター 俳優 高橋克実
制 作 秋田テレビ株式会社
制作協力 AKITA メディアテクノロジーズ株式会社

この特別番組は生誕150年を記念し、鈴木空如の画業とその生き方を世に広めるために制作した。番組は、ナビゲーター八嶋智人氏が大仙市と法隆寺を旅し、空如と出会う中で受け取った空如の想いを視聴者と共有してゆく。

実 績

地上波放送及びネット配信(YouTubeで2023年6月まで配信)を行った。さらに、教育用DVDを100部制作し、大仙市内の中学校及び市内外の図書館に配布した。

また、放送当日に鈴木空如を顕彰する会が主催した市民向けの視聴会が行われた。

概 要

オープニング(2分)

法隆寺外観、金堂壁画、鈴木空如の紹介。

本編1(13分)

ナビゲーター八嶋智人氏(以下八嶋氏)が大仙市所蔵の空如作品を見学し、あわせて空如を育てた土地柄やその風景を実感する。

本編2(13分30秒)

八嶋氏が地域の中で大切にされて来た空如の作品を拝見し、地域の中で生き続ける空如の存在を認識する。また、法隆寺聖徳会で開催された特別展鈴木空如筆「法隆寺金堂壁画」展を監修した有賀祥隆氏が、絵画史における法隆寺金堂壁画の位置付けを解説する。

本編3(14分)

八嶋氏が法隆寺聖徳会館を訪れ、特別展で展示されている空如筆「法隆寺金堂壁画」をはじめて見る。解説は東京国立博物館の瀬谷愛氏。金堂壁画見どころや空如の模写絵の特徴を解説する。

本編4(4分55秒)

八嶋氏が、大仙市と法隆寺で空如の画業とその生き方に会い、俳優として生きる自分と空如を重ね思索をめぐらし、空如の生き方に共感を示す。

番組タイトルロゴ



※『空如 不変の美を伝えた画人』HP
<https://www.akt.co.jp/info/kuunyo>
YouTube 配信は2024年6月30日まで

視聴会の様子



【関連展示】 鈴木空如の画業を支えた人びと～坂本東嶽・佐藤維山～

主 催 秋田県美郷町／美郷町教育委員会

後 援 株式会社 秋田魁新報社

特別協力・資料提供

大仙市／佐藤公一氏／澤峰山常泉寺

会 期 令和5(2023)年4月22日(土)～5月

28日(日) ※開館日数32日間

会 場 美郷町学友館

出品数 46点

観覧料 300円(高校生以下無料)

本企画展では、若き日の空如の画業を支えた坂本東嶽(理一郎)、さらに空如作品を郷土に一つでも多く残したいと願った佐藤維山(維一郎)、彼らと空如の交流を紹介する。

この展示をとおして、空如の画業が東嶽・維山そして郷土の名もない人びとによって支えられていたことを再認識し、空如の画業は郷土の誇りであることを来館者に伝えることを目的とした。

なお、大仙市から作品17点を貸し出した。

実 績

入場者数 834人(1日平均約26人)

展示概要

【坂本東嶽 ～若き日の空如を支えた人】

(1) 坂本家と鈴木家

(2) 「阿弥陀三尊」と「法隆寺金堂壁画模写」

(5点展示)

(3) 書簡に見る東嶽と空如(11点展示)

【古画の研究】(前期5点、後期7点展示)

【法隆寺金堂壁画模写】12面の写真(8分の1スケール)

【佐藤維山 ～空如の画業を後世に伝えたいと願

った人】

(1) 佐藤家と鈴木家 【パネル展示】

(2) 空如からの薫陶 【4点展示】

(3) 作品が語る仏画家鈴木空如の姿(14点展示)



※作成にあたり、美郷町「生涯学習課歴史文化財班編『開催報告書』を参照した。

【協力展示】 東日本大震災復興祈念「悠久の絆奈良・東北のみほとけ展」

主催 「絆とうほく～復興への祈り」実行委員会（tbc東北放送／河北新報社／東北歴史博物館／多賀城市／TBSテレビ／MBSテレビ／青森テレビ／IBC岩手放送／テレビユー山形／テレビユー福島）
総監修 有賀祥隆（東北大学名誉教授／東京芸術大学客員教授）

監修 長岡龍作（東北大学大学院文学研究科・文学部教授）

特別協力 法隆寺、西大寺、唐招提寺

学術協力 奈良国立博物館

企画制作 tbc東北放送

展示件数 60件
（うち国宝12件、重要文化財27件）

特別協賛 ケーズデンキグループ株式会社デンコードー／東京エレクトロン株式会社

協賛 サントリーホールディングス株式会社／株式会社七十七銀行／損害保険ジャパン株式会社／第一生命保険株式会社／大和ハウス工業株式会社／東芝インフラシステムズ株式会社／凸版印刷株式会社／NIPPON EXPRESS ホールディングス株式会社／野村證券株式会社／株式会社みずほ銀行／三井住友信託銀行株式会社／株式会社三菱UFJ銀行／ロート製薬株式会社

後援 多賀城市教育委員会／多賀城市観光協会多賀城・七ヶ浜商工会／NHK 仙台放送局仙台放送／ミヤギテレビk h b 東日本放送／エフエム仙台／朝日新聞仙台総局／毎日新聞仙台支局／読売新聞東北総局／宮城ケーブルテレビ株式会社

会期 令和5（2023）年4月15日～6月11日
※開館日数50日間

会場 東北歴史博物館特別展示室

出品数 60件（うち国宝12件、重要文化財27件）※大仙市から鈴木空如筆「法隆寺金堂壁画」第6・10号壁を貸出。

本特別展は、東日本大震災から13回忌となる2023年、「鎮魂と祈り」のために、奈良と東北の国宝、重要文化財を含む寺宝が宮城の地に一堂に会す展示会で、大仙市からは鈴木空如筆「法隆寺金堂壁画」第6・10号壁の2点を貸し出した。

実績

入場者数 54,663人（1日平均約1,093人）

展示概要

第1章 苦難に立ち向かう～奈良の仏像と東北の仏像～

第2章 日本仏教のいしずえを築いた人

※鈴木空如筆「法隆寺金堂壁画」第6・10号壁が展示された。

第3章 叡尊・忍性の教えと美術

第4章 心の復興へ奈良仏教の教えと救済

第5章 奈良仏教と未来への営み



鈴木空如筆「法隆寺金堂壁画」第6号壁
阿弥陀浄土図（縦301.2×横251）

※作成にあたり、「絆とうほく～復興への祈り」実行委員会事務局編「東日本大震災復興祈念「悠久の絆奈良・東北のみほとけ展」実施報告書」を参照した。

作品集荷

日時：令和5年1月26日（木）
午前10時～午前11時
場所：太田文化プラザ 多目的ホール
人員：東北歴史博物館
学芸部長 千葉正利氏
東北放送 米村旅人氏
NX日本通運職員3名
立会：観光文化スポーツ部
文化財課副主幹 高橋一倫



(オープニングセレモニー)



展示について

本展に鈴木空如筆「法隆寺金堂壁画12面」（秋田県指定有形文化財）のうち、第6号壁「阿弥陀浄土図」及び第10号壁「薬師浄土図」を貸し出した。

展示場所は、第6・10号壁共に「第2章 日本仏教の礎を築いた人々」のブースで展示された。

特筆すべきことに、第6号壁「阿弥陀浄土図」は「鑑真和上坐像」（国宝）と向かい合わせての展示となった。これは、鑑真が亡くなる際、結跏趺坐をして西に向かって亡くなった故事による。

鑑真が感得した世界が再現され、見学者を幽玄の世界に誘う演出が成されていた。空如の模本の新たな活用方法であり、今後の模本の活用の参考となった。

開幕式

日時：令和5年4月15日（土）
午前8時30分～午前10時
場所：東北歴史博物館 1階エントランスホール（宮城県多賀城市高崎1-22-1）
出席者：大仙市長 老松博行
観光文化スポーツ部長 加賀貢規
同部文化財課主幹 高橋一倫

観光ブースの設置

主催者の配慮により、大仙市の観光ブースが設置された。他に奈良県、多賀城市の観光ブースが設置された。

(会場前にて 老松市長)



(設置状況)



〈参考資料〉



空如模「鳥獸戯画（甲巻）」より



世に隠れたる真の画人

鈴木空如



秋田県大仙市





生い立ちから東京美術学校入学まで

鈴木空如（本名：久治、1873-1946）は、1873（明治6）年2月25日に現在の大仙市太田町小神成に父・虎之助と母・フミの六人兄妹の末っ子として生まれました。幼少の頃より絵を描くことが上手で、小学校の同級生・門脇八五郎は後年「久治はさがし（賢い）人だった。人っこ（人物）描くにとても上手だった」と証言しています。生家には10歳の頃に描いたとされる「山鳥の図」（写真1）が残されています。

空如は小学校卒業後、家業の農業に従事していましたが、画家になる志を断つことができず19歳の時に上京します。上京後は、長山蘭林という画工に師事して東京美術学校（以下美校）への入学を目指し、1893（明治26）年8月に美校に入学願書を提出しました。しかし、当時の美校の入学は9月であり願書提出の期を逃していたとされます。

さらに、1894（明治27）年に日清戦争が勃発して近衛師団工兵大隊第一中隊に配属され出征し、美校への入学は遠のいていきました。



写真1 「山鳥の図」



写真2 「軍装姿」

空如は台湾を転戦し、戦地から実家に宛てた手紙には自分は無事なこと、故郷の味が恋しいこと、さらに「軍装の敵の死屍道路に満千」、「即時に処せられしもの三十余名を見る」、「死屍累々足の突き場」も無いといったと生々しい戦況を克明に記しています。

空如は1895（明治28）年11月に戦地台湾から帰還し、東京本郷にあった日本画会附属共立美術学館に入学します。この美術学館は、後に東京美術学校公認の予備校となり、学館卒業後は無試験で美校入学が許されています。空如は、1896（明治29）年1月に写し終えたとする「定智本 十二神将図」（高山寺伝来、益田鈍翁旧蔵、写真3）について、実家に宛てた手紙の中で「美術学館時代に写せし小物」と述べています。

そして、空如は1898（明治31）年に東京美術学校日本画選科に入学します。上京から6年余りが経っていました。選科とは、本課と違い一課もしくは数課の実技を学ぶ教育課程です。空如は実家に宛てた手紙の中で、本科を選ばなかった理由を「眼病のため体操を免かれ」たいためと述べています。

美校入学後、空如は山名貫義（1836-1902）に師事します。山名は土佐・住吉派の絵師でしたが、一方で、明治二十年代に行われた臨時全国宝物取調に参加して、奈良・京都の



写真3 空如模「安底羅大将」

寺社の宝物を調査するなど古画研究の第一人者でもありました。

山名は、国宝「薬師寺吉祥天像」を1889年に模写しており最古のものですが、空如も同画の模写をしています。恐らく、山名の配慮があって空如も模写することができたのでしょう。



空如誕生までの苦悩と葛藤

1904(明治37)年7月、空如は東京美術学校研究科を修了し、画家としての道を歩み始めますが、この後7年に渡り病に苦しむこととなります。空如自身は「遠き原因を有する病症」「神経衰弱」と述べています。

この病の発症原因は、兄実業じつぎょうからの経済的な自立と、画家として成功することへの焦りであったと考えられます。画家として世に知られ成功することの難しさは、空如自身「美術・宗教等の如く精神の養いを主とするものは、医学、工学、理学士の如く形を学ぶものと比べれば、その進捗は誠に遅々たるもの」と述べています。

実際、空如は研究科を修了して間もない頃に、兄実業に宛てた手紙に「揮毫方きごうご紹介」くださいと頼み、花鳥山水画と仏画の揮毫料を示しています。しかし、そのわずか16日後には花鳥山水画の揮毫について「学校在学中は所在方面を一応研究致し候も、退校後は仏画専攻致し居り候」と断ってくれるよう兄実業に頼んでいます。

空如は仏画と古画の制作・研究だけで生計を立てたいと望んでいましたが、現実には難しいことも理解していたのです。

1907(明治40)年1月、療養のため静岡県田方郡土肥村(現伊豆市)にいました。空如は土肥から兄実業に宛てた手紙に「衰弱の身は最も寒気を感じる」と述べていることから、駿河湾に面し温暖な気候であった土肥を選んだのでしょう。この手



写真5 「山名貫義24回忌墓参記念」前列左2人目が空如

紙には「東京山名先生の奥様は病体にも拘わらず」慰問状や物品を贈ってくれ、さらに「病症長引くも費用の心配なく療養せられよ」と励ましの言葉をいただいたと記しています。山名貫義と空如の関係が忍ばれ、さらに空如を支えその前途を期待する山名家の人々の姿を見ることが出来ます。

苦悩と葛藤の中で、自分への期待と周囲の期待に応えようとする若き日の空如の姿が駿河湾を望む土肥にありました。



法隆寺金堂壁画との出会い

空如と法隆寺金堂壁画との出会いは、東京美術学校が例年行う奈良・京都への修学旅行の時です。空如はこの修学旅行の記録として「奈良県下・京都府下 修学旅行日誌」(写真6)を記します。1901(明治34)年9月24日の項には「金堂に入て吾



写真4 空如模「薬師寺吉祥天像」

は先ず有名なる曇徴の古壁画を見んと欲せり。然れども室内暗淡、明に弁ずべからずと雖も熟視して後、漸く覷うことを得たり」と記しています。

空如の記録からは、金堂内は薄暗く壁画を見るのもやとであった状況がわかり、さらに金堂壁画に対する関心の高さがうかがわれます。

恐らく、山名貫義からの指導もあり、すでに空如が「未見の恩師」と仰いだ桜井香雲(1840-1902)による金堂壁画の模写絵を見ていたためでしょう。桜井の模写絵は傷や剥落を現状のまま模写したもので、空如はこの模写絵を基礎にして自らの金堂壁画の模写を行っています。

このように、空如はすでに学生時代から金堂壁画に注目し



写真7「阿弥陀三尊像」
1906(明治39)頃、絹本着色 184.3
×146.7 cm、秋田県美郷町所蔵

ていたことがうかがえ、さらに1933(昭和8)年12月18日付けで甥良蔵に宛てた手紙には「三十余年来」壁画模写に取り組んでいると述べていることから、東京美術学校研究科修了の前後から壁画模写が空如の人生の目標となっていたことは確かでしょう。

そして空如は、美校卒業後、法隆寺金堂壁画研究にかかわる重要な作品を制作しています。現在、秋田県美郷町学友館が所蔵している「阿弥陀三尊像」(写真7)です。

この「阿弥陀三尊像」は、法隆寺金堂壁画第6号「阿弥陀浄土図」の阿弥陀如来・観音菩薩・勢至菩薩をモチーフにして描かれたもので、1906(明治39)年に完成し、秋田伝神画会美術展覧会に出陳した作品です。

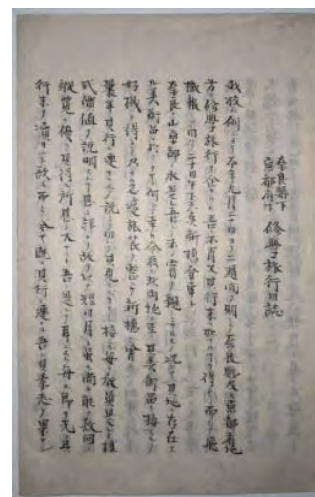


写真6「修学旅行日記」

苦悩と葛藤の末に

空如を苦しめた「神経衰弱」は、1912(明治45)年4月から5月にかけて行われた、山陰・隠岐地方への古社寺巡礼の旅をきっかけに全快に向かいます。

この巡礼は、出雲出身の日本画家竹田霞村(1884-1955)が同行しています。霞村は川端玉章(1842-1913)、下村観山(1873-1930)に師事して将来を嘱望された逸材でしたが、画壇の派閥争いに嫌気がさし、また父親が他界したこともあり、1916(大正5)年に故郷に戻っています。空如とは十一歳の年の差はありましたが、下宿先が同じで終生の友となります。空如没後、霞村は空如の遺言として画材一式を受け継ぎ、この画材をもって彼生涯の傑作とされる「溪谷の春」と題す六曲一双の屏風を完成させています。



写真8「巡礼姿」
左：空如、右：霞村

さて、空如は旅行先の出雲から甥良蔵に宛てた手紙に「僅かの日数を以て、精神上、健康上多大の効果を得しを感謝」とつづり「青年と生れ替りて勉強致すべき考え」と気力に満ちた文面を認めています。さらに3ヶ月後の8月、姪松代に宛てた手紙には「本年は健康本復、七年経りにて始めて清か清かしき心地に相成り、日々仏天に感謝、研究」に励んでいると伝えていきます。

この山陰・隠岐地方への巡礼によって空如は「遠き原因を有する病症」「精神衰弱」を乗り越え、翌年1913(大正2)年には号を「長春」から「空如」に改めています。まさに青年の志をもって「空如」に生まれ変わったのです。このとき空如は40歳を迎えていました。



そして空如になる



写真9 空如模「金胎仏画帖 金剛界諸尊像 大日如来」

このような心境の変化により、空如は法隆寺金堂壁画模写と並ぶ一大事業を自らに課します。それは「聖尊図像」と自ら名付け、仏画を描くための教科書を作り世に広めることでした。制作期間は1916(大正5)年から12年間で、「如法的名像(仏法に適った画像・彫像)」「趣意書」を選んで模写し、美濃判二つ折りの冊子にまとめ上げるというものでした。残念ながら冊子にすることは叶いませんでしたが、原稿が残されておりその紙数は美濃判で2千枚を超え、散逸してしまった金胎仏画帖(写真9)などの仏画の名品も多く含まれています。

空如は苦悩と葛藤を経て、私淑する桜井香雲に続き、独力で金堂壁画を原寸大でありのまま写しきるといふ偉業に挑み、さらに同時並行して「聖尊図像」の編集・執筆までを独力でいう前人未踏の領域へと足を踏み入れたのです。



永遠の生命の芸術を求めて

同じ時代を生きた芸術家達は、鈴木空如をどう評価していたのでしょうか。

平福百穂は、1922(大正11)年に国宝調査のため大仙市角間川の浄土宗浄蓮寺を訪れました。「絹本着色 当麻曼荼羅図」(現重要文化財)を調査するためです。その際、この曼荼羅の評価について「老兄(空如)が見たならば」としてその価値を判断しています。

さらに、香取秀真(1874-1954、鑄金家・歌人・東京美術学校教授)は、空如に次の歌二首を法隆寺の古材(写真10)に認め贈っています。

- ・飛鳥の明日香のてふり青丹よし ならのてふりを今君に見る
- ・古の大き聖のあと思ふ すなわち君は現世の聖

香取は空如の筆遣いを見ていると、金堂壁画を描いた飛鳥・奈良時代の画工達を見ているようだとし、さらに「現世の聖」と称賛します。

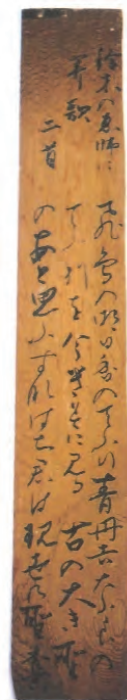


写真10

また、寺崎広業^{てらさきこうぎょう}（1866-1919、日本画家、秋田生れ）は美校教授として空如を指導していましたが、その彼が「現代において、飛鳥・奈良の仏画を致々（つとめ励む）として研究して居る恐るべき一県人」がいると、空如の仏画研究に対して畏敬の念を述べています。

このように、当時の芸術家達の間では、空如の仏画・古画の研究は高く評価されていたのです。しかし、空如の画業を知る者は、ごく一部の人間に限られ、世の多くの人びとには知られることはありませんでした。

空如は、1938（昭和13）年に出版された中島耕一編『一人一文 随想集 続』（秋田活版所）で、芸術に携わる者の心構えを次のように述べています。

私は如何なる芸術でも、その芸術が神の芸術であり、仏の芸術であり、永遠の生命の芸術であるという信念を以て自分の生命をそれに打ち込む様な者でなければ、始めから駄目だと思っております。

若き日の戦争体験、そして苦悩と葛藤の経験から出た厳しい言葉ですが、この一文に仏画家 鈴木空如の“生き方”が示されています。



写真11 自室にて



家族のこと

空如の家族は、妻なを、娘豊子の三人でした。

1918（大正7）年2月、空如は坂井なをと結納を交わします。空如45歳、なを29歳、共に初婚でした。空如の暮らしぶりは、収入の大半を仏画の調査旅費と画材調達に当てしまうため、いつも困窮し寒中に足袋も買えないというもので、なをは内職を掛持ちするなどして空如の画業を支えました。空如は自身の展覧会で新聞記者に「今日の事はただ妻の内助以外に何がありません」と語っています。

そして、1920（大正9）年2月24日、豊子が誕生します。空如47歳の時で、その溺愛ぶりは「育児日誌」（写真12）が物語っています。しかし、その幸せもつかのま、1925（大正14）年10月28日、午後3時30分、豊子はわずか5歳8か月で没しています。

一周忌にあたり、空如は臨終の際の会話、豊子の性格、神仏を敬う姿、そして娘に画家への道を勧めた際、「絵ハカクケレドモ、エカキハ忌ヤダ」と断られたことなどを追悼文に記し、近い人びとに送っています。



写真12 「育児日誌」



空如亡き後

1946（昭和21）年7月21日、空如は73年の生涯を閉じます。そして、なをは姪が経営する吉池旅館を手伝い、1978（昭和53）年12月22日、90歳で空如と共に歩んだ慎ましやかな一生を終えます。いま家族三人は生家の墓所に眠っています。

空如没後、彼を顕彰する事業が、戦後の混乱が収束しつつあった昭和30年代頃から、故郷長信田村で村民や彼を敬慕する人々の手により始まります。

1958（昭和33）年、長信田中学校教頭で豊川村出身の草彌清次郎（日本画家草彌興宗の弟）が、「鈴木空如画伯伝」を執筆し太田町公民館が発行しています。空如の画業と人となりをまとめたものとしては初めてのものです。

また、内小友村の佐藤維山（本名：維一郎、1890-1965）は、空如の甥重治と旧制横手中学の同期で、この縁で空如を知り親しく接し、空如の“生き方”に感化された一人です。

彼は、亡くなる半年前の1964（昭和39）年8月に『仏絵師の聖 鈴木空如翁』を自費出版します。この手記がなければ、空如は自身の仏画に落款をしないという有名なエピソードや、空如の素顔や芸術に対する想い、ラジオ体操で子供達と活動を共にする空如の姿などを知ることはできません。

さらに、1966（昭和41）年7月24日、顕彰碑（写真13）が空如没後20年を期して、彼を慕う者239名の浄財により、「次代をになう子弟の教育の場」という理由から、長信田小学校校庭に建立されました。



写真13「法隆寺宝壁の真を伝えた 空如画聖の碑」

年忌ごとに講演を行っていた奈良環之助（1891-1970、初代秋田市美術館長）は23回忌の時に次のように空如を評しています。

その絵かきが人気のあるときは讃仰する人は多いが、はやるとか、はやらないことを別にして敬慕することは画人以前の人間の本質の問題である。

そこに空如のえらさがある。亡きあともその絵かきを讃仰する顕彰会があるのは全国で鈴木空如のみであろう。今仏画を画技の一つの方法として書いている絵かきはあるが、信仰と美術を一体にした人は空如が最後の人であろう。

鈴木空如、その画業は華やかなものではありません。しかし、法隆寺金堂壁画の模写をはじめとする画業の多くは永く語り継がれてゆくことでしょう。

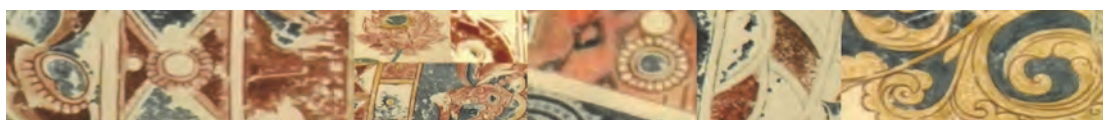
参考文献

- 中島耕一編『一人一文 随想集 続』秋田活版所、1938年
- 佐藤維山著『仏絵師の聖 鈴木空如翁』1964年
- 『画聖鈴木空如』太田公民館、1992年
- 大岸佐吉『信仰の仏画師鈴木空如』春秋社、1993年

引用史料

- 空如書簡No.8（1895年）、同No.10（1895年）、同No.32（1902年）、同No.40（1903年）、同No.44（1905年）、同No.45（1905年）、同No.54（1907年）、同No.67（1912年）、同No.68（1912年）、同No.91（1923年）、同No.120（1933年）

※タイトル「世に隠れたる真の画人」は、竹田霞村が空如を評したものです。



空如略年譜

1873 (明治6) 年2月25日

現在の秋田県大仙市太田町小神成の旧家に生まれる。

1894 (明治27) 年 21歳

日清戦争に出征、清国盛京省、台湾を転戦、1895年10月に帰還。

1898 (明治31) 年 25歳

東京美術学校日本画選科に入学し、古画の権威山名貫義に師事、1902年に卒業。

さらに、同校研究科に進学して1904年7月に修了する。

1918 (大正7) 年2月 45歳

坂井なを (29歳) と結婚。

1920 (大正9) 年2月24日 47歳

長女豊子出生。

1922 (大正11) 年 49歳

法隆寺金堂壁画原寸大模写完成 (模写1作目)

1925 (大正14) 年10月28日 52歳

豊子夭折。

1932 (昭和7) 年 59歳

法隆寺金堂壁画原寸大模写完成 (模写2作目)

同年3月4日～7日、朝日新聞社文化事業部主催「鈴木空筆 国宝名画模本展覧会 (新宿三越百貨店) 開催。

1936 (昭和11) 年 63歳

法隆寺金堂壁画原寸大模写完成 (模写3作目)

1946 (昭和21) 年7月21日 73歳

姪が経営する箱根湯本・吉池旅館で逝去。享年73歳。

1949 (昭和24) 年1月26日 法隆寺金堂火災、壁画焼損する。

同年、協和銀行本店 (東京・芝大門) で「空如遺作法隆寺金堂壁画模本展」開催。

1966 (昭和41) 年7月

地元の有志らが顕彰碑「法隆寺宝壁の真を伝えた空如画聖の碑」を建立 (太田町長信田小学校校庭)。



空如筆「法隆寺金堂壁画」より

©DAISEN, AKITA, 2023.





もしや
模写ってなんだろう？

模写をするって

どういうこと？



鈴木空如生誕の地
太田地域マスコットキャラクター
あか松のぼったん

ナビゲーターのぼったんです！
鈴木空如の模写の意味を、一緒に
考えてみましょう。

秋田県大仙市





問1 模写とは

模写は、洋の東西を問わず、芸術の世界で一般的に行われてきたことです。芸術は、時代や世相に左右されることが多いのですが、日本の場合、世相が変わっても絵画様式にそれほど影響はありませんでした。

とくに仏画、水墨画、障壁画など、日本の代表的な絵画様式は、精神性や様式、図様、技法などが時代を超えて継承されています。近代以降、画家個人が自由に個性的な絵を描くようになってからも、千数百年受け継がれてきた精神性や様式、図様、技法などは、彼らの作品に大きな影響を与えています。

さて、鈴木空如は、5千尊の仏を模写したと伝えられていますが、創作の仏画も描いています。その作品を見ますと、日本的な精神性や様式、図様、技法などを駆使して仏画を描いています。

さらに、空如の模写絵は完成度がとても高く、専門家から「平安時代の紙に空如が模写絵を描いたら本物か模写絵か区別がつかないだろう」と言われています。空如の模写絵には、本物が持つ精神性や様式、図様、技法をよく伝えており、本物にも勝るとも劣らない迫力があるのです。



問2 何のために模写するのですか？

模写の目的は大きく4つあります。

1 宗教上の教義に基づいた図像を継承する

密教図像の描き方は、儀軌（規則）により厳密に定められています。多くの場合、尊像の姿を線だけで描いた白描図像（彩色しない）により継承されています。白描図像は、仏法を師から弟子へ授け伝える際に、覚え書きとして制作されます。現在、伝えられている密教図像の多くは白描図像であり、ほとんどが原本ではない模写本として千年数百年と継承されています。

2 様式を継承する

仏教など思想的な絵画様式で、その精神性を会得するために写し取ることも模写の一つといえます。また狩野派や土佐派、円山派といった絵師の工房では、技法の統一を図るために技法書や下図帳などがつくられました。なかでも円山派の写生帖などは時代を超えて模写され、様式が継承されています。

3 修業としての模写

日本の絵画は伝統を継承することで、今日まで発展してきたともいえます。古くから画家は古画の模写を行い、技術や精神性を学びとり、自身の絵に活かして新たな創作の糧としてきました。今日でもその伝統は受け継がれ、美術系大学などでは模写を授業に取り入れているところが数多くあります。

4 保存としての模写

文化財の保存と公開を両立させるために、損傷の危険性が著しい作品の模写を行い、原本の代わりに展示をする方法があります。

さらに、原本と同じ素材で図像を模写することで、古典^{こてんかいが}絵画の技法を次世代に伝えるという、文化を守るために必要な人材を育てるという側面もあります。

一方、熟練した画家による手作業の模写には膨大な時間がかかることから、デジタル技術による詳細な現状の記録や、原本により近い素材への印刷も試みられています。いま、伝統的な模写の技術とデジタル技術^{ゆうごう}を融合するなど、新たな模写の取組が進んでいます。



問3 模写にはどのような手法がありますか？

大きく3つの手法があります。

1 現状^{げんじょうもしゃ}模写

絵具の剥落^{はくらく}や損傷^{こうほ}、後補^{こうほ}などを含めて原本の現在の状態を、忠実に写し取る模写です。

2 再現^{さいげんもしゃ}模写

(1) 法隆寺金堂壁画^{しょうそん}の焼損後、1967（昭和42）年から68年にかけて行われた模写は再現模写と呼ばれます。この模写は、旧壁画模写（空如の模写など焼損以前に行われていた模写）を参考にして、焼損前の1949（昭和24）年当時の状態を再現するために、剥落なども写し取る手法がとられました。

復元模写が、原本の制作当初を推定して行うのに対し、焼損直前の状態を再現するということから、再現模写という言葉が用いられたと考えられます。

(2) (1) から転じて、人的や自然破壊などによって損傷、あるいは損失した作品を、資料などを参考にして作品が損なわれる前の状態に再現する模写のことをいいます。

(3) 復元模写は(1)、(2)と同義で用いることもあります。

3 復元^{ふくげんもしゃ}模写

(1) 原本の描かれた当初の姿を美術史や科学的な根拠^{すよう}などに基づいて図様や色彩を推定（想定）して描く模写です。

(2) 図様を復元するとともに古色^{こしよく}を施し、条件のよい状態で保存されていた場合、今日あるであろう状態を推定して描くこともあります。古色復元模写^{こしよくふくげんもしゃ}、現状推定模写^{げんじょうすいていもしゃ}ともいいます。



問4 模写にはどのような技法がありますか？

模写の手法には、大きく3つの技法があります。

1 上げ写し

模写や修理などに用いられる技法の一つです。手本となる書画の上に、薄い紙を乗せ上げ下ろしし、残像現象を利用して写し取る技法です。

2 透き写し

模写や修理、絵画制作の際の転写に用いられる技法の一つです。手本となる書画の上に、薄い紙や絹を重ねて、透ける性質を利用して写し取る技法です。

3 臨写

臨模ともいいます。手本となる書画の原本を傍に置き、観察しながら模写します。原本でしか知り得ない精神性や躍動感、色調などを確認して写し取ります。



まとめ

模写は、古くから絵画技法の一つとして伝承されてきた代表的な技法です。しかも、それは「単に真似をする」ということではなく、先人達の絵画技法や芸術性、精神性をも後世に伝えるという役割があります。さらに、画家は模写をとおして、先人達に学び自らの創作の糧としてきたのです。

一方で、模写には文化財保護の役割もあります。いま、文化財の積極的活用が唱えられています。その際、模写を活用することで、文化財の保存と公開という半ば相反することを両立させることができるのです。

さて、空如の模写は、私達に時代を超えて、先人達の技法とその芸術性、そして精神性までを見事に伝えてくれています。さらに、法隆寺金堂壁画に代表されるように、今となっては原本が損傷し失われてしまった絵画を、後世に伝える役割も果たしており、現在につながる文化財保護に、いち早く取り組んでいたと言えますでしょう。

空如の模写絵は「単なるコピー」ではなく、国宝や重文に指定されている古典絵画や典籍の名品の大部分が模写・写本であるように、空如の模写絵もそれらの名品と同じ価値を有している、と言っても過言ではないでしょう。

・参考引用文献 東京藝術大学大学院文化財保存学日本画研究室編『図解 日本画用語事典』2007年



生誕 150 年 鈴木空如顕彰事業 実施報告書
発行 秋田県大仙市 令和 6 年 3 月 29 日

生誕 150 年鈴木空如顕彰事業事務局

観光文化スポーツ部文化財課

部長 加賀貢規(文化財課長事務取扱)

主幹 高橋一倫(主担、編集・執筆)

主査 星宮聡仁(副担)／主査 熊谷明希(副担)



空如筆「法隆寺金堂壁画」
9号壁獅子
©DAISEN, AKITA 2023